

キリト（偽）が行く魔女の世界

仙儒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

キリト（偽）になったのでSAOで無双したいと思います。え？
違うの？

目次

漆黒の剣士	1
シャールロット・エルウィン・イエーガー	6
街角でバツタリ	12
坂本美緒	17
サーニャ	22
始まりのゲーム	28
博打	33
寝心地	40
キャットファイト	47
空の魔王	52
北郷直葉	58
ぬけがけ	63
502	70
夢	75

漆黒の剣士

今日も一日平和であった…、なんてことは無い。

ガランド少将からのラヴコールで501とか言う所に行つて来てくれと頼まれた。

「なあ、ガランド。その501つてところに行つて具体的には何をすればいいんだ？」

「トレヴァー・マロニーがちよつかいを出してくるかもしれないからね。して来たらウィッチ達を護りつつ、情報を集めてくれないかい？」

トレヴァー・マロニー。確か反ウィッチ派の大物人物だった気がする。

それにしても、反ウィッチ派か…、何時の時代もあるもんだね。

魔女狩りの事が未だに続いてるのか？

前にサブクエストだと思つて進めていたら、想像以上に巨大なクエストになつて、俺の城ごとウィッチにあげた事を思い出した。

いや、一対八万のバトルは死ぬかと思つた。まさか、あんな大きなイベントがあつた何て俺知らなかつたよ。

おかげで、料理とか、生産系のスキル以外のスキルレベルと熟練度が一気に上がった。でも、二度とやりたくない。

他にもウィッチ達に魔法を教えたりもした。俺の教える魔法を習得した子は終ぞ居なかつたけど…、その代わり生産系の事や剣技何かは習得した子が何人かいた。

そのクエストも大掛かりな物だったからかいつの間にか城持ちで「妖精たちの王」とか言う称号が付いた。

何なんだろう…、この称号？

ステータス画面出したらいつの間にか名前の横についていたものだ。別にステータスに補正がかかるとかそういう物ではない。

ユウキの絶剣とかつて言う通り名と同じなのだろうか？

定期的に来る怪異討伐クエストをこれから受ける度に増えていくのだろうか？

どちらにしろ、余り気持ちの良いクエスト内容でないのは確かだ。今回もクエストが始まってからだいぶ時間が経つ。

これからどうなるんだろうか？

そう思いながらアイテムボックスからワインを出して飲む。

前の魔女狩りクエストの中盤、城主やっている時に献上された品。造り方教えたの俺だけど。

あいつら気を使わなくても良いって言っているのに気を使って色々献上してくるんだもんなあ。流石に金銀財宝献上された時は困って、貧しい家の人達に配ったんだよな。

あいつら元気かな？

一対八万と言う無理ゲークリアしたので滅んではいけないと思うんだけど。滅ぼされてないよね？

「美味しそうなワインだね。貰い」

「あ、おいー」

取られたワインをラツパ飲みされる。

仮にも美人なんだからそんな行儀の悪い事するなよな。

呆れながら言う。

「職務中に酒飲むなよ」

「良いの、良いの。君と私しかいないんだから」

はあ、と溜息をつき、同じワインを出して渡す。

少し驚いた顔をしてボトルを見ると「良いの？」と聞いてくる。

一本目を勝手に飲んだんだから今更驚かなくても良いだろう。駄目だったら出さない。

「要らないんだつたらしまっぞ」

そう言うのと慌てて「いるいる」と言いながらボトルを受け取るガランド。

顔には出ていないが、耳としつぽが出て嬉しそうにピコピコと動いている。余程このワインが気に入ったのだろう。

さて、話がそれだが、本題に戻り、偽造された身分証明書を受け取り、ガランドに別れを告げて部屋を出ていく。

キリトが出て行った扉をボーっと眺め続ける。
彼とはヒスパニア怪異との時に出会った。

コンドル軍団の一員として参戦し、部隊とはぐれ、怪異に襲われて生きるのを諦めた時に彼が現れた。

「その君、怪我は無いか？」

剣を片手に持ち、立つ姿はさながら騎士だった。

見とれていると、彼の姿がぶれて、美しい斬撃が怪異を次々に斬り裂いた。

赤、青、オレンジ、緑のエフェクトを背景に囲んでいた怪異が完全に消失する。

「……、ふう、これで最後みたいだな」

そう言うのと剣を背中に背負い、再び此方を向く。

「クエスト完了って、改めて怪我は無いか？」

手を差し伸べながら聞いてくる。

何とか頷くが、恐怖が後から後から湧いてきて、震えていた。
そんな私を察したのか何も言わずにお姫様抱っこする。

状況を理解した私が、慌てていると更なる浮遊感が私を襲う。
地面がみるみるうちに遠ざかり、空を飛んでいた。

「ここが君達の世界だ。嬉しいことも悲しみも君を待っている」
そこから見た世界は圧巻だった。

思えば、あれが空への憧れの始まりだった。

「お気に召して頂けましたか？ 姫」

気を使ってくれたのだろう。ウインクして来る彼を見たら胸が高鳴った。顔が熱くなる。

それを彼は、恥ずかしいからだど勘違いしていたようだが。楽しいひと時であった。

彼から怪異についての情報も手に入れた。

段々と近くなっていく地面に別れの時間が近づいていることを物語っていた。

完全に地面に彼の足が付いて降ろされる。

「飛んでいる時に人らしき影と建物が見えた。さあ、此処から先は自分の足で歩いて行くんだ」

少しでも別れの時間を遠ざけて考えてみるが、何も思いつかない。

これが最後かもしれない、そう思うだけで胸がチクリと痛んだ。

せめて名前だけでも聞こうと声をあげる。

「私の名前はアドルフ・イーネ・ガランド。貴方の名前は？」

「俺の名はキリトだ。よろしくな」

そう言うのと彼は飛んで行ってしまった。

キリト、キリト、か。ん？ ブラック・ソーディアン 漆黒の剣王と同じ名前。唐突に一つの

童話を思い出す。

『妖精たちの王』。魔女狩りを舞台にした実在したと言われる賢王。ウィッチ達には神と崇められる人物。その人物は男でありながら、様々な魔法を駆使し、空を飛ぶ術をウィッチ達に授けたという。ウィッチが箒で空を飛ぶと言うのは、この時に着いたイメージだという。

確か、最後は城に匿ったウィッチ達を護るためにたった一人で八万の敵兵に突っ込んで終わりだった筈。

まさか、ね。

扶桑に観戦武官として派遣された先でキリトに再開した。これに私は運命を感じた。

ただ、多くのウィッチ女に囲まれていたのは気に食わない。蹴りを思いつき脛に入れた私は悪くない。

後に扶桑海事変と呼ばれる熾烈な戦いを陰からサポートして、戦いが終わると居なくなつた。

ご丁寧に反ウィッチ派のメンバーを掃除して。手柄も置いて行つた。

しばらく戦場を転々として彼の情報を集め、そして見つけ出したのだ。

扶桑のウィッチ共はこれを知つたらなんと言うだろうか？

想像しただけで愉快だ。やはり、運命の女神は私に味方してくれている。それだけで笑みがこぼれる。

さて、行き遅れと言われてまでも、彼の事に時間を費やしたんだ。責任を取つて私を幸せにしてみらわなきや釣り合いが取れない。

この一軒が終わつたら、私の両親に挨拶に来てもらわないと。

「楽しみだね、キリト。子供の名前は何か良いかな♡」

何か急に寒気がした。

風邪か？ そう思いながら、ガランドの手配した船に乗り込む。

大丈夫か？ だいぶお高そうな外観の船なんだけど。

案内された部屋に入り、ベッドに腰かけて、クエストログを見る。やっぱり更新されていた。

何々、ウィッチ達を護れ、か。ネウロイ討伐クエストに連動して発動している。

それにしてもウィッチ達を護る、助ける系のクエストが多いな。前回もそのまた前もそうだった気がする。

シャーロット・エルウィン・イエーガー

船に揺られて2日目。

特にやることもないので、デツキにて海を眺めながら紅茶を口にす
る。

自分で作ったクッキーを口に放り込む。

やっぱり、紅茶には甘い物セットだよな。

それにしても、501か。

皆元気だろうか？

実の所、501に行くのはこれが初めてではない。

ある時は、傭兵として。ある時は兵士として。また、ある時は…、さて、何だったか。

俺がいるパーティーでは脱落者は出ないんだけど、他の所で連動して起こるキークエストで、知ら無い間にウィッチ全滅してゲームオーバー。何て理不尽なことが度々起こっている。

その度にクエストは最初からやり直しになるのだ。

ご丁寧に、相手の記憶までリセットして。他の上がった熟練度やスキルレベル、レベルアップに必要な経験値はリセットされないのが救いだが。

それに今回に限らず、クエストのやり直し時に思った事なのだが、仕様なのかは知らないが、必ずしも同じ内容であるわけではない。クエスト全体の流れが変わるわけでも無いが、細かなサブクエストだったり、頼まれる内容が微妙に変わったたり。

今回、トレヴァー・マロニーの情報を引き出せと言うのは何気に初めてだったりする。

それにしても、キークエストとクエストの発動条件、フラグが良くわからない。

その為に、こまめにクエストログを見る癖をつけた。

ん？ 通信？ 誰からだろうか。

「ほい」

通信をオンにしてトランシーバーに返事をするが、沈黙が続く。

「おーい、もしもーし」

駄目だこりや、そう思った時、小さくか細い声で『キリト…?』と問いかけて来た。

この声には聞き覚えがあった。今向かっている501に所属しているシャーロット・エルウィン・イエーガー。

「シャーリー…、なのか?」

恐る恐る問いかける。まだ、クエスト進行状、彼女とは会っていない設定になっているはずだ。前も、その前も、そのまた前も俺との記憶は覚えていなかったのに、今回は覚えているのか?

もしかして、一定の条件が整うと記憶が戻るのか?

ますますわからん。

『そーだよー。あたしだよー! シャーリーだよー! お前の女で、奥さんなシャーリーだよ!!』

声のポリユームが一気に上がる。

五月蠅いのでポリユームを絞る。

『なあなあ、501には何時来るんだ? もうそろそろ来るんだろ?』

その質問に、どこまで答えていいやら悩む。

「いや、今回は501には合流しない」

反ウィッチ派の事を教えて要らぬ負担をかけるよりも、話さない方が良くと結論付けた。その負担を減らすための俺であり、今回のクエストだ。

『…何で? 何でなんだ? あたしのこと嫌いになったのか? 嫌だよ。見捨てないでよ、お前に嫌われないためならなんだってしてやるからさ。…、ああそうか! 他のメス共が邪魔なんだな! そうだよな、お前があたしを見捨てるわけないもん。すぐに片付けて来るから待ってろ』

ちよ、今、サラッと不穏なこと言わなかった!?

「しゃ、シャーリー、ストップだ! 今回の依頼内容のせいなんだ。着いたら改めて会って話すから、な!」

『…本当だな? でも邪魔なら行ってくれよ、ちゃんと始末するから。じゃあな、キリト。愛してるよ♡』

そう言うと、通信は切れた。
まるで嵐の用だったな。

あたしは、ひし形の何かをいじりながら思う。

このひし形の何かはあたしが物心ついた時には既に存在していたものだ。

ただ、何のための道具かはわからない。親には大切にしなさいと言われていたから大切にはしていた。

はやさを追求してストライカーユニットを改造しては怒られ、遂には追い出されて501に拾われた。

その501でたまたま、落としたところを発見されて、驚いた。501メンバーは全員そのひし形の何かを持っていたのだ。

余り、オカルトと言うのを信じるわけでは無いけど、運命ってやつを感じるな。

そう思っているとひし形の何かを落としてしまう。
そうするとひし形がひかり、空中に絵が出て来る。

どういう技術かはわからない。それはカラーな写真？ だった。
そこには黒髪の男の腕に自分の腕を絡めて、幸せそうに此方に向かつて微笑んでいるあたしの写真。

次の瞬間、体内に雷が落ちたような衝撃が体全身を駆けぬける。
知らない筈の事が頭の中でリフレインする。

何故忘れていたのかはわからない。
普段ひょうひょうとして、女に弱くて、でも、いざという時頼りになる“漢”。

何時も人のいない場所で無茶して帰ってくる。それを、どれだけ心

配しているのかわかっていない彼。

そう言えば、取り戻した記憶が確かなら、あいつがもうすぐ来るはずだ。

でも、他の奴に会わせるのは嫌だなあ。

そう思つて通信機材を見る。確か、あいつは通信機持ち歩いていたな。

確かコードは…と。

通信が繋がるまでの間、はやる気持ちを抑えきれないでいた。

『はい』

久々に聞いた声に思わずに身震いする。

興奮して、耳としっぽが出る。

「キリト」

そう言うのと驚いた口調で

『シャーリー…、なのか?』

と問い返してくる。

名前を呼ばれたただけなのに顔がにやけるのが止まらない。ルツキーニが居なくて良かった。

余りの嬉しさに私は声を上げて叫んでしまった。

色々あったが、デートの約束を取り付けられた。

あたしは、急いであいつが到着する日にちに合わせて休暇申請をしに行く。

ああ、楽しみだな。

当日、珍しく着飾つて基地を後にした。

基地の奴らが口をあんどり開けているのが見えた。

何だよ、あたしがお洒落するのがそんなに変かよ。

港について待っていると、男たちに言い寄られた。確かにあたしはモテることを自負している。

声をかけて来る男どもは、皆あたしの胸を見ている。

だが、生憎と着飾つて来たのは、お前たちのためじゃない。この胸も心も体も、髪の毛一本に至るまであいつの物だ。

言い寄って来た男どもを軽くあしらひ、船を待つ。

船が着き降りて来る人々も男は皆あたしを見て見とれていた。

女連れの男は、女に脛を蹴られ、そうでない男はあたしの胸を見るか、見ながら声をかけて来た。

「おーい、シャーリー！」

「キリト！」

待ち人が手を振りながら呼びかけて来る。

それを見た男どもは舌打ちしながら去っていった。

「態々迎えに来てくれなくても良かったのに」

「夫を出迎えるのも妻の務めだ」

そう笑顔で言う。

「そ、そうか…、所でシャーリーさん？　なにゆえ腕を組んでいるのでしょうか？」

ぴったりと密着したあたしにそう言ってくるキリト。

上目使いで「駄目か？」と聞いたら、「駄目じゃないです」と返って来た。

「ほら、速く行こうぜ！　案内してやるからさ」

そう言いながら引っ張る。

街に入ってから店に入り、食事をする。

注文の品が来る前にキリトが真面目な顔で聞いてくる。

「…、本当に思い出したんだな。でも、どうして？」

そう言うキリトの前にひし形を出す。

驚いた表情をした後に「これをどこで？」と聞いてきた。

「わからない。気が付いたら持っていた。使い方もわからないし、何なんだ？　これ？」

そう言うと、どういう物だかを教えてくれた。

写真や、メッセージを残すための物らしい。

「他の501のメンバーは持ってないのか？」

その言葉にムカツとする。あたしと居るのに他の雌の事を考えるんだな。

気にいらない。
あたしは、素っ気なく「知らない」と答えた。

街角でバツタリ

シャーリーが持っていたのは記録結晶だった。別段珍しいアイテムでは無い。

写真撮影したり、音声を録音できる程度の物だ。

まあ、レアアイテムでは無いし、持っただけでも不思議ではない。シャーリーは使い方を知らないらしいが…、

改めて記録結晶の使い方を教える。

余談だが、記録結晶を使ってミーナの歌を録音して、流したら、顔真っ赤にして銃持ちながら追い掛け回された記憶がある。

いいじゃん。音楽学校行ってたんだからさ、いずれ人前で聞かれるのが早まっただけじゃん。そう言うが、聞き入れて貰えなかった。話が逸れた。

結果から言うと、シャーリーは記録結晶を使えなかった。

この世界の住民はもしかして使えないのか？

それなら納得できる。

回復結晶を十分に渡しても、全滅、何て事は多々あった。

危なくなったら転移結晶を使えと、転移結晶渡しても転移してこないことも一回や二回じゃない。

俺がパーティーで使うと効果が発揮されていたので、周りの者達も使えとばかり思い込んでいた。

これも仕様なのだろうか？

記念写真一枚しか入っていない記録結晶をシャーリーへと返す。

彼女の話を聞いた限り、記録結晶を他の皆が持っているか知らないとの事だった。

多分、持っていないだろう。

使えないのに持っただけでも仕方が無いし。

それにしても、何故シャーリーさんは不機嫌になっていらっしやるのでしょうか？

女心は難しいという事か。取り敢えず、次から次に注文してバクバ

ク食べないでくれるかな？ 支払いするのは俺なんだし。思わず苦笑いしてしまう。

そう言えば、転移結晶を使う転移についてなんだが、どうも俺が寝泊まりする場所に転移するようになっていた。これも仕様だろう。他に条件があるのかもしれないが、わからないし、めんどくさいので試す気は更々無い。

取り敢えず、シャーリーとは此処で別れてホテルを探そう。

トイレに行つてくるとシャーリーに言い、レジに行き、会計を済ませる。流石にもう食べないだろうと踏んでの行動だ。

戻るとシャーリーも店を出る準備をしていた。

どうやらトイレに行くという嘘は見抜かれていたらしい。

「忙しいだろうに、態々ありがとうな。シャーリー」

「気にするなって」

そう言うシャーリー。

俺はその場を後にしようとしたら、シャーリーが後を付いてくる。

何故付いてくるんだ？ 此方はガランドに定時報告しなくちやいけないんだけど…、

501はちよつとした騒ぎになっていた。

その中でルツキーニだけがうー、つと唸っていた。

大切な相方が取られると。

まあ、そうだろう。シャーロット・エルウィン・イエーガー中尉が

男性にモテることは周知のことだった。

だが、本人はそれに興味が無く、スピードだけを追い求めていた。そんな彼女が、スピードよりも男を取ったと言うのだから驚きだ。基地を出る前にお洒落をしているのを見て、恋は人を変えるとは言った物だな。そう思った。

何人かついて行きたがったが、いつなんどきネウロイが出現するかわからないので却下された。

ただ一人、シャーリーと同じ日に休暇届を出した人物以外は。

メーデー！ メーデー！

姉さん事件です。生まれてこの方姉何て居た事無いけど。

シャーリーを何とか説得して、別れようとしたところに後ろから誰かに抱き付かれた。

誰だ？ と思つたら「先生♡」と言う声が聞こえた。俺の事を先生と言うのは扶桑の三羽鳥+α位だ。

そして、此処は501の近場である。501に所属している扶桑人は一人しか居ない。扶桑の三羽鳥の一人、坂本美緒だ。

「ちっ」

シャーリーが舌打ちをする。

その舌打ちを気にした様子もなく、美緒はシャーリーに向かって鼻で笑う。

「まだ居たのかイエーガー。さっさと帰ったらどうなんだ？」

「あ？」

その一言にどれだけの感情が込められているのだろうか？ おお

よそ、女の子が出してはいけないような声を出すシャーリー。ハイライトが消えた目で此方をニコニコと見つめる美緒。

そのまま、顔をスリスリと俺に擦り付けて来る。

「いい加減キリトから離れろよ雌猫」

「私がどうしよう関係ない事だ。…、負け犬」

「…殺す」

そう言うシャーリーは銃を取り出して撃って来た。

うお、あぶねえ。俺は剣をリコールして銃弾を切り裂く。そのまま近づき剣で銃を斬り、手刀を入れてシャーリーを気絶させる。まさか、仲間に向かって何のためらいもなく銃を向け撃つとは思わなかった。

気絶したシャーリーを抱えようとしたら、俺に抱き付いていた美緒が離れる。

そして、何処かから取り出したナイフをシャーリーめがけて振り下ろそうとする。

お前もか！

…、速くホテルに行きたい。この場から離れたい。そう思いながら、美緒にも鳩尾にグーパンを入れて気絶させる。

ホテルにチェックインし、ベッドに二人を寝かせて、ガランドに通信をする。

『へえー、楽しそうじゃない色男』

言葉とは裏腹に、不機嫌そうにそう言うガランド。

連絡時間が遅れた経緯を問いただされたので、そのまま話したらガランドがへそを曲げだした。

「おいおい、勘弁してくれよ」

二重の意味で。

「はあ、この間のワインをやるから機嫌を直してくれないか？」
『…』

あれ？ あのワインお気に入りじゃないのか？ あんなに喜んで

いたのに。

もう、どうしろって言うのさあ。

そう思っていたら、銃声が響く。

ガランドと話していたトランシーバーが吹き飛ぶ。

あーあ、あれ一台しかないのに…、今後の連絡どうしよう。そう呑気に考えながら振り向くとハイライトがサヨナラした目で銃を構えて此方を見ているシャーリーの姿が映る。

その銃どこから出したんだ？

「なあなあ、コレだけじゃなくて他の雌猫^女とも連絡してるのか？ どうしたらあたしだけを見てくれるんだ？ お前が望むんだつたらなんだってしてやるぞ」

美緒をコレ呼ばわりか。

一応、お前の上司なんだがな。

シャーリーは俺の手を掴んで自分の胸に押し付ける。

「他の男どもが見て来る胸だ。お前の好きにして良いんだぞ♡」

その言葉に、そして、胸に押し付けられた手に伝わるマシユマロのような柔らかい感覚に理性がグラつとする。

そのまま襲おうとする考えを捨てるために、反対の手で思いっきり自分を殴る。

その行動は、流石に予想外だったのか驚いた顔をして固まるシャーリー。その隙に胸に押し当てられていた手を引き抜く。

…、引き抜く際に少し揉んだのばれて無いよね？

坂本美緒

キリトさんとの出会いは徹子ちゃんが道場に連れてきたことであつた。

最近、成長が著しい徹子ちゃん。どうやら、連れて来た男の人に鍛えて貰っていたみたい。

失礼だが、細い見た目にこの人が強いとはどうしても思えなかつた。

だが、先生は興味を持ったらしい。

竹刀を持って向き合う二人。

初めの合図が下りた瞬間、仕掛けたのは先生だった。素早い突きによる攻撃を男は難なくいなす。

次の瞬間、男の姿がぶれる。

一瞬で先生の懐に入り込み、竹刀を振るう。

先生は間一髪のところ回避したが、息が上がっている。ほんの一瞬の攻防。

ゴクリ、

誰かが生唾を飲むのが聞こえた。

一度間合いを取る先生。それを黙って見ている男。

先生は笑みを浮かべ、闘志を燃やしている。こんな先生を見るのは初めてかもしれない。無言で二刀流になる先生。

本気だ…、本気の先生だ。

気迫が伝わったのか、それとも思う所があつたのか、初めて構える男。

また、先生から仕掛けた。

竹刀同士がぶつかる音が響く。

二人の剣のぶつかり合いは、まるで舞を舞っているかのように美しかった。

激しい攻防が続く。

段々と先生に攻撃が掠めるようになった。

それでも笑みを浮かべている。

そして、先生が勝負に出る。

——燕返し。

神速の三連撃。名だたる剣豪が習得しようと鍛錬に鍛錬を重ね、それでも辿り着ける者はわずかな一つの到達点でる。

しかし、男はその神速の三連撃が見えているかのように素早く竹刀を振るい、全ての攻撃を防ぐ。

「何！」

これには流石に先生も驚いて一瞬膠着状態になる。

その隙を見逃すはずもなく、

「うおおおおおー!!」

雄たけびと共に反撃が始まった。

男の剣戟は最早見えない。

ただ、竹刀同士がぶつかると音が響くから、攻撃はしているのが伺える。

音は十回なり、気が付いたら先生の腹に竹刀が付きつけられていた。

「技の名前はマザーズ・ロザリオ。神速の十一連撃からなる技…、永久に届かぬ友の剣だ」

男の独白がその場に木霊する。

へたり込んでしまった先生に手を伸ばす男。

「大丈夫か？」

「ああ、ありがとう」

そう言つて男の手を握り、立ち上がる。

そうすると歓声上がる。道場に居る人物たち全員が今の試合に魅入っていたのだ。

しかし、不満そうに一人だけ口を尖らせている人物がいた。男を連れて来た徹子ちゃんだ。

「キリト、何で先生と同じ二刀流で戦わなかったんだ？ あの綺麗な剣技が見たかったのに…」

その言葉で先生は

「やはり、本気では無かったのか」

「いいや、本気ではあつたさ。片手剣での、な」

そう言うのと少し悔しそうな顔をしたが、笑いながら先生が挨拶する。

「名乗り遅れたな、私の名前は北郷章香。良ければ名前を教えてくださいませんか？」

「キリトだ、よろしく頼む」

そう言つて握手する二人。

なんだか良くわからないが、絵になっている気がした。

それから、時々、徹子ちゃんに手を引かれて、道場に現れるようになった。

その度に見慣れない珍しいお菓子やなんかを差し入れしてくれるので道場の子達の楽しみでもあった。

私も、醇子も何時しか目で追うようになった。

キリトさんは色々な事を教えてくれた。楽しい事、辛い事、嬉しい事。

「たくさん見て、聞いて、知るんだ。そして大きく、大きくなれ」

私達は人間として大切なことをいっばい、いっばい教えて貰った。

私は魔眼持ちのウィッチ。魔眼を操り切れずに持て余していた。左右で目の色が違うことから気味悪がられて虐められました。おま

けに泣き虫でどうしようもなく臆病だ。

それを眼帯をすることで隠していたが、転んだ瞬間に眼帯が外れて、見られてしまった。

終わったと思つた。せつかく仲良くなれたのにこれでお終いだ。

「虹彩異色症か？」

「こうさいいしよ……？」

「左右の目の色が違う人の事だよ。オッドアイって言つて外国でごくまれに居るんだ」

良くわからないが、そんなことどうでも良かった。キリトさんに気味悪がられる。

キリトさんの両手が私の顔を包むように触れる。

「綺麗な目だ。美緒が何かに悩んでいるのは知ってたが…、ごめんな、

気が付いてやれなくて」

そつと抱きしめられる。

「大丈夫だよ、気持ち悪くななんてない。こんなことで美緒のこと嫌いになるわけないだろう」

我慢の限界だった。

嫌われると思い、怖くいて怖くてたまらなかった。

「ギリ、ドぎあ、あ、ん」

「よく頑張ったな、偉いぞ」

その言葉が私の心を溶かしていく。

私は胸の内を吐き出した。魔眼のこと、それを制御できずに持て余していたこと。そのせいで辛い思いをしてきたこと。

キリトさんは優しく撫でながら、「そうか」と言い続ける。

さんざん泣き、落ち着いたところにキリトさんが言う。

「その眼はきつと、美緒にしかできない何かを成し遂げるためにあるんだと思う」

だから、その事を誇るべきだとキリトさんが言う。いつか、誇ることができる日が来ると。

その日から道場が終わってから毎日キリトさんの居る所へ行くようになった。

キリトさんは掘つ立て小屋と言っているけど、随分立派なツリーハウスだと思う。中も扶桑の造りとはだいぶ違っていた。

そんな中、キリトさんの家でひし形を発見した。何時も持ち歩いているひし形を出して何度も見比べる。私が持っているのと全く同じ物だ。

このひし形、私が産まれた時に持って生まれたらしい。不思議な話だ。

次の瞬間、頭痛がした。

目の前がぼやける。

頭の中に何かが映る。それは、見慣れない仲間と共に空をかける未来の姿。そして、常に私達を護り続けてくれた漆黒の剣士…キリトさんの事だ。

危ないから下がって居ろ、そう言つて自分は一番危ないところへと行くのだ。此方の気持ちも少しは考えてほしい。そうして、事が全て済んだのなら何の前触れもなく姿を眩ませてしまふのだ。

全てを思い出した。

自分は神と名乗る人物にキリトと会いたいと願い、何度も輪廻転生と言ふのを繰り返していたことも。

そして、彼が何者であるかも。妖精たちの王キリト。その正体は太古から災厄の前に現れ、ウィツチ達に力をかすウィツチ達の守り神。

今度こそはこの人に寄り添つて、この人の隣を歩くのだ。もう逃がさない。誰にも邪魔はさせない。

その為にも、先生や醇子ちゃん、徹子ちゃんもなるべくキリトさんから遠ざけなくちや。

サーニヤ

夜空を背景に色とりどりの線が彩る。

その光景は、まるでこの世のものとは思え無い程鮮やかで幻想的だった。

その線が通った所に居たネウロイは皆、コアごと斬り裂かれて消滅している。

「これで全部か…」

そう言つて、背中の鞆に剣を納める。

クエストログを開いて再度討伐数と倒したネウロイの数を確認する。

「よし、クエストクリアつと」

そう言つてアイテムボックスを見る。緊急クエストだけあつて、経験値とこの世界の通貨、MPCがおいしい。後、回復アイテムが結構な数手に入った。

この世界、宝箱に金銀財宝が詰まっていることは多くあれど、装備品や回復系のアイテム、転移結晶はクエストの報酬でないと貰えなかつたりする。まあ、回復に関してはスキルで回復できるので、回復アイテムを使うことは殆どないが。奥義結晶もSPチャージあるから使う機会ないし。

そう考えると、このゲームで一番要らない物なのでは無かろうか？

俺以外には回復結晶とか転移結晶使えないし。見た目だけが綺麗だから、いざという時にはこれを売って金にしよう。

あ、でもポーション系のアイテムなら俺が使わなくても使えるだろう、飲むだけだし。後で美緒とシャーリーに渡しておこう。

501のメンバーも、いざと言う時、仲間が普通に使つて居れば使うのを躊躇わないだろうし。

思い立ったが吉日。早速、ポーションの生産に入りますか。素材アイテムも腐るほどアイテム倉庫には入っている。

因みに、素材アイテムもクエストをクリアしなければ手に入らなかつたりする。

昔、魔女狩りクエストの中盤にかけて、緊急クエスト「ペストを治せ」で、ペスト治すために状態異常回復薬を作りまくったおかげで生産系スキルも上がりまくって、ポーション系のアイテム作るのなら成功率100%だ。今なら味も付け足せるおまけつき。

：無難にイチゴ味にしておこう。
そう考えながら飛んで帰る。

未だに尻尾を出さないトレヴァー・マロニー。それに若干の苛立ちを覚えながらも、こればかりは根気の勝負かと思いなおす。

501の近くの森に造った掘った立て小屋の扉を開ける。

「ただいま」

「お帰りなさい」

そう言うが誰も居るはずもなく、空しく響くだけだが。

「ああ、ただいま」
が？

余りにも自然な流れで「お帰りなさい」と聞こえたから返事をしてしまったが、此処には俺以外に住んでいる人間は居ない。余りにも寂し過ぎて幻聴でも聞こえたか？

そう思い、横を向くと恍惚とした顔で此方を見つめているウィッチが居た。

俺の感情は言うまでもなく。待つてくれ、どうして誰も知らない筈の家に彼女が居るんだ？

「え〜と…、何故ここに居るんでしょうか？ アレクサンドラ・ウラジミール・リトヴァクさん」

「サーニャで良い。他人行儀は嫌」

そう言うサーニャさん。

「それに、妻が旦那さんを待つのは当たり前でしよう？」

ハイライトのサヨナラした目でそう言ってくる。

それに、身の危機を感じて居たら、ソファアに座るように促され、前に置かれたテーブルにスープが置かれる。

「夜遅いから消化に良い物にしといたから」

そう言いながら隣に密着して、スープをスプーンですくい、口元まで持ってくる。

「あの…、サーニャさん？」

「？、さんは要らない…、冷めちゃうよ？」

「いや、だから何であなたが此処にいるのかの説明を…」

——『<●><●>』ジーツ

「説明…」

——『<●><●>』ジーツ

「…、頂きます」

「うん、熱いから気をつけてね？」

このまま問いただしても、平行線で時間の無駄だと言う事がわかったので折れる。決してハイライトのない目で見られるのが怖かったからではない。

サーニャに食べさせてもらいながら、彼女との再会を思い出す。

なんてことは無い。食材を買いに行って店で鉢合わせただけだ。此方を穴が開くんじやないかと言う程に見つめて来る彼女。俺にとっては再会だが、彼女にとっては初めましての筈だし、どうしたんだろう？

「…、見つけた」

余りにも小さな声で聞こえなかったが、深く追求するのはやめておいた。

その後、カフェによってケーキと紅茶を頼んでまったりして居たら、店員さんから「相席よろしいでしょうか？」と声をかけられた。他にも席は空いているけど予約でも入っているのだろうか？

店員さんの顔色が悪いのも気になるが、取り敢えず、「構いません」と答えとく。

すると、先程ぶりの顔であった。

彼女もお茶をしに来たのか。買い物ついでによくある事だ。特に疑問を持つことも無かった。

「……」

「……」

お互いに何もしやべらない。可笑しなことではないか、彼女は人見知りする人物で、本当に初めましての時には口を利くどころか、近寄ってすら来なかった。エイラが間に入って邪魔していたのもあるが。

でも、だから不思議に思う。何故、そんな彼女が相席何てしてまで此処にいるのか。余程、此処のメニューにお気に入りがあ、多少りスクを払っても食べたいものがあるのだろうか？

サーニヤがそこまでして食べたいメニューは気になるが、これ以上は彼女が可愛そうだ。他にも席は空いているし、俺が離ればいいだけか。

— そう思い、席を立ち移動しようとしたら袖を掴まれた。

何だ？　と思つたらサーニヤが店員が俺の注文した品を持つてくるのを指さしていて、元の席に座る事になる。

— しょうがないので紅茶に口を付ける。

「このお店…、良く来るんですか？」

— サーニヤが話題を振つて来た。珍しい。

「買い物ついでに寄る事はありますね。ケーキ美味しいですし」

— 一応敬語で話す。

「甘い物、好きなんですか？」

「ええ、特にケーキなんかは」

— 今日は珍しいことだらけだ、明日は槍でも降るかな？

— そんな失礼なことを考えて居ると、機嫌が良いのか鼻歌を歌いだす

サーニヤ。

— 確か、音楽家の娘なんだっけ？　そこらへん詳しくないからわからないが、ミーナと気が合うかもしれない。同じ音楽が好きな者同志だし。

— それからサーニヤと他愛のない話をして、会計をして店を出た。

— それだけの筈なんだけど…、シャーリーみたいに思い出したのか？

— 俺に対して甲斐甲斐しく世話を焼いているサーニヤに思い切つて聞いてみる。

「覚えてるよ。私の歌声を綺麗だって褒めてくれたことも、私を庇って怪我させてしまった事も、お父さん達を助けてくれたことも、料理が上手いって褒めてくれたことも、みんなみんな覚えてるよ」
再びハイライトの消えた目で此方を見ながらまくしたてる。

「きつと来てくれるって信じてたよ？」 私の、私だけの王子様」

言っている意味はわからないが、かなりキテるやばい奴と言う事だけはわかった。後は、俺の事を覚えていたということも。

それにしても、サーニヤのご両親を救った覚え何て無いんだけどな。

怪異討伐クエストでネウロイを片っ端から片付けて、被害にあった人達の治療をして、ネウロイを倒しての繰り返しだったからな。第一次ネウロイ対戦以降は……。もしかしたらその中にサーニヤの両親が居たのか？ だとしても、それで俺だと結論に行きつくのは極論過ぎないか？

その事を言ってみる。

「漆黒の服装で剣を背中に二本背負って、不思議な宝石や薬で治療していく男の人が？」

…、俺しかないね。不思議な宝石は回復結晶の事を言ってるのか？

まあ、いや。取り敢えず、「不思議な奴もいたもんだ」と言ったらジト目で見られた。

あ、そうそう、この場所の事は皆には話さないで欲しいと頼んだら、頬を染めて「二人だけの秘密だね」と上機嫌になったのはいったい何なんだ？

食事を終えると、サーニヤが名残惜しそうに「そろそろ戻らなきゃ」と立ち上がる。

「また来ても良い？」

そう言うサーニヤ。ガランドから頼まれている依頼、そして彼女の負担を考えたら、もう来ない方が良さだろう。

「いや、もう来ない方が…」

「また来ても良い？」

ハイライトのサヨナラした目で拳銃を突き付けながら再度聞いてくる。

「どうぞまた来てください！」

「うん、それじゃ、おやすみなさい。あなた」

そう言い残して、今度こそ夜空の闇の中に消えて行った。

始まりのゲーム

VR対応新作SAOゲーム。

ボッチのボッチによるボッチの為のゲーム。

主人公は君だ！

がパッケージに書かれているゲームをウキウキ気分でゲーム本体にセットして、この日のために買ったVRを付けてゲームを起動する。

今回は全く新しいSAOを体感してもらうためにスキルやなんか以外の内容公開が行われなかった。その為、ソフトの値段が高く、懐は痛い気にならないこととする。

このゲーム、SAO、ALO、GGO等のスキルも使えるらしい。小説読んでないけど、アニメで見だし、こういうゲームは、どちらも知らなくても大体ゲームを進めていくうえで余り関係なかったりする。知っていればより楽しめると思うだけで。

それにどうしても外せない内容は基本動作説明の後にプロローグとして流れるだろう。

ゲームを起動するといきなり一人の人物が出てきて語り始める。SAOでは外すことのできない人物、茅場晶彦が独白を始める。

いきなりの大物の出現に興奮を隠せないでいる。

茅場は語る。アインクラット創世へと至る経緯を手短に。

その後、ヒースクリフになった彼から戦闘の指南を受ける。指南中に「ほお、流星は彼を継ぐものだな」と繰り返していたが、今作品でのキーワードにでもなるのだろうか？

異様に長いチュートリアルを終えて、ゲームが始まる前にヒースクリフから渡したいものがあるとアイテム全般をいきなり貰った。

嫌に羽振りが良いな。そんなに高難易度なのだろうか？

「なに、気にする必要はない。人類の可能性を背負う君に、ささやかなプレゼントだとも思ってくれ。期待しているよ、キリト君」

そう言う姿を消すヒースクリフ。代わりに茅場の姿に戻って出

て来る。

「さつき言ったように、私は君を、人類の可能性を信じている。さあ、行きたまえ」

今度こそ茅場は消え、目の前にはリンクスタートと文字が浮かんでいる。

「リンクスタート！」

俺は叫ぶと同時に周りが暗くなる。

次に目を開いたら始まりの街に……、なんてことは無く、街どころか村ですらない。

大自然に囲まれた場所から始まった。これって、ALOでキリトが始まりの街では無く、バトルフィールドに飛ばされたのと同じ原理なのか？ それとも仕様か。

仕様だよな。どう考えても。取り敢えず、スキル画面を出して今使えるスキルを確認して、色々と試してみる。

チュートリアルが長かったせいもあり、結構な時間を費やしていたのでそろそろログアウトしようと思ひ、ログアウトボタンを探すが見当たらない。

何度確認してもログアウトボタンが無い。

思わずに大声で、

「茅場あー……!!!」

そう叫んだ。

そこから永い永い旅が始まる。

と言っても、クエストをクリアして、次のクエストを受けるのにキリトの時間で言えばつい一分前の出来事でも短くて数か月、長くて何十年と経ったことになっていたりとして、今一時間概念がわからないが、これもゲームの仕様だろうと割り切ることにした。全てのメインクエストを終わらせれば現実世界に戻るだろう。

そう楽観視して。

目が覚める。

何だ夢か。しかし、懐かしい夢を見た物だ。相変わらず現実世界では無い。

まあ、良いか。そう思い、キッチンに行き、朝食を作る。

幾ら悩んでも俺のおバカな脳みそではわからないし、幸い、SAOのようなデスゲームでは無い。昔、一度だけ不注意でHPをゼロにして死んだと思ったら、ゲームスタート時の始まりの場所で復活した。何もない森の中。

ご丁寧にログに『これはデスゲームでは無い』と記載されていた。トロフィーか何かかな？

後、痛みが無いのが嬉しいです。衝撃やなんかはわかるんだけどね。

もし、痛覚も機能して居たら痛みに耐えきれずに精神的に壊れていただろう。

でも、快樂はわかるんだよね。SAOでキリトとアスナがしていたからか？

美味しそうな匂いで思考の海から引き戻される。

考え事をしていても、スキルアシストのおかげで美味しい飯ができる。便利だね、スキルアシスト。

できた朝食を食べながら今日は何をしようか考える。

緊急のクエストが入らない限り、基本的に暇なのだ。近くの川で釣りでもしようか？

釣りスキルは余り上げて無いからな。ポーションの大量生産も終わったことだし、それもいいかも知れない。

そう考えて居ると緊急クエストが舞い込んでくる。

場所は…、にやりと口角が吊り上がる。

どうやら待ち続けていたキークエストが進んだらしい。トレヴァー・マロニーの刺客たちが501へと乗り込もうとしていた。

指令室で書類を整理していた時にそれは起きた。

パリーンつと窓ガラスが割れる音が響き、何事だと思い見ると光り輝く矢が刺さっていた。

直ぐに外を確認するが、誰も居ない。

光り輝く矢には紙が結びつけられており、小さな袋も付いていた。恐る恐るそれらを取ると矢は何もなかったかのように消えた。

「これは…、バツジ？ こっちは…!!」

ブリタニアの国旗を模したバツジに反ウィッチ派の暗躍リスト、ウィッチを疎む連中が軍内部には少なくないのは知っていた。でも、実際にこうして突き付けられるとショックは大きかった。

「ミーナ!!」

ガラスの割れる音を聞きつけて駆け込んでくる二人。

バルクホルンと美緒。

「私なら大丈夫よ」

そう言う。

「何が起こったんだ？」

そう問いかけて来る美緒に、弓矢が飛んできたことと、それに付けられていた反ウィッチ派の暗躍リストを見せる。

「っ!!」

二人から息を呑むのが聞こえた。

「どう思うかしら？」

これが本当なら、大変なことだ。事が事だけに大事にしたくはない

し、どこからの情報だか知れないので鵜呑みにもできない。

「一つ良いか？」

手を上げながら聞いてくる美緒。

「それは光り輝く矢だったんだな？」

「そうだけれど…心当たりがあるの？」

そう言うとき美緒は胸を張りながら、

「ああ、この情報は信頼できる。裏を取るために一つ、演技を打つぞ。手伝ってくれ」

そう言う。

どういうことか、こんな回りくどい事をするのは誰なのか問い詰める。

美緒は一言。

「妖精たちの王だ」

それだけ答えた。

妖精たちの王…何かの暗号かしら？ ブラック・ソーディアン 漆黒の剣王……きりと…キ

リト？

そこまで思考が辿り着いた時に急に思い出す。

「ねえ、私達本当に11人だったかしら」

「？ 今は11人だろう」

トウルデーの答えに一人無理やり納得する。

ウツチでもないのに空を飛び、最前線で戦う剣士何て居るはずがない。

私達は御伽噺の中で戦っているわけでは無い。無いと言うのに…何故こんなにも懐かしく、愛おしく感じるのだろうか。

知らず知らずのうちに耳と尻尾が出てはちきれんばかりに尻尾が動くのを手で抑え込む。

その光景を首を傾げて見ていたトウルデー。

美緒だけが無表情で見ていた。

博打

クエストログが更新される。

クエスト内容は…、研究資料を手に入れることと、新兵器とそのプロトタイプを破壊すること。新兵器ってなんだ？

反ウィッチ派の新兵器とやらが気になる。

…、行けばわかるか。

隠ぺい魔法を使いつつ、時に研究員に情報を吐かせて気絶させつつ進む。

実験室では大量のネウロイのデータと新兵器とやらの設計図があつた。

どれが目的の資料かわからないので資料は全部アイテムボックスに入れていく。

新兵器はロボットだった。

何か破壊するのはもつたいたいなあ、そう思いつつ剣をリコールして真つ二つにする。ついでに周りの機械も破壊しておく。

恐らく、研究所は此処一つでは無いだろうけど、その一つを再起不能まで壊しておけば何かしらのプロジェクトの邪魔をする時間くらいは稼げるだろう。目に見える物はあらかじめ壊し終わってクエストログを開くとクエストクリアの表示がされていた。

転移結晶を使い、掘つ立て小屋に戻る。

持って帰って来た資料をどうするか悩む。ガランドに連絡を取ろうにも連絡手段が無いし、これを何時までも俺が持っていてもしようがない物だ。

ここで一手、博打をすることにする。

下手をすれば501がまともに機能しなくなる恐れがあつた。

それでも、一般人な俺よりもこの情報は役に立つと、彼女たちの分岐点の一つになるかもしれない可能性を捨てると言う選択肢は俺には無かつた。

大丈夫、俺の知っている彼女達ならばきつと…、
後は、信じてみよう。皆優秀な娘たちだもの。

一番重要だと思われる物を弓矢に番えて501の指令室にめがけて射る。

そのまま城の屋根に移り、室内に誰も居なくなるのを待つ。

話し声が聞こえなくなり、更に気配が無くなると俺は指令室に入り込み、残りの資料全てをアイテムボックスから取り出して、デスクに置く。

転移結晶で掘っ立て小屋に戻る。

あ、ポーション置いてくるの忘れた。

燃え盛るパ・ド・カレーの街。

避難民が押し寄せて大混乱していた。

「落ち着いて！ 船ならまだまだある！ 家族ごとにまとまって避難船に乗り込んで！」

「ふざけるな！ 奴らは、ネウロイもうはそこまで来ているんだぞ！ 俺達を見殺しにする気か！」

怒号が飛び交う。

「お父様、速く避難しませんと、このままでは!!」

私は叫ぶ。怖くて怖くてたまらなかった。

「ペリーヌ、聞きなさい。私達は誇り高い貴族だ。市民を見捨てて一番に逃げ出すわけにはいかないんだ」

私に諭すように言うお父様。

クロステルマン家はガリアの貴族ではあるが、この国がガリアになる前。アルヴヘイム王国の王、妖精王キリトに仕えた騎士であり、妖精王から魔法医としての技術や知識を賜ったの由緒ある家系である。そんな王に託されたのはブリタニアとの交易地の一大拠点であるこのパ・ド・カレーである。

「お前は、これらを持って先に逃げなさい。妖精王から授かった家宝だ」

大きな宝石の結晶。レイピア、剣。他にも色々な品が入った宝箱。それを従者に持たせて言う。

「お前の父であって、幸せだったよ」

その一言で全てを悟ってしまった。お父様は此処で死ぬ気なんだ、と。

「駄目です、お父様！ 私も残ります！」

そう言ってお父様の側に駆け寄ろうとしたが、従者何人かに取り押さえられる。

それでも抜け出そうと必死にもがいていると、お父様が「連れてけ」と声をかけ、従者は涙をこらえて私を外へと連れだす。

船に乗せられて、船が出発する。最後の避難船だ。それをお父様が見送っている。

「お父様あぁー！！！！」

手を伸ばすが届きはしない。

ネウロイの軍団がすぐ近くまで見えた。

ネウロイの攻撃が港を炎の海に変える。お父様も炎に呑み込まれた。

「っ！！」

叫びたかった。でも、声が出ない。

嗚咽だけがもれる。

「ペリーヌー！ ペリーヌー！！」

ブリタニアの港で死した筈のお父様が出迎えた。

その事に驚き、ただただ開いた口が塞がらなかった。

ようやく現実と理解できた瞬間、人目も気にせずにお父様に抱き付き、大声を出して泣いた。お父様もそれを咎めはせずに優しく撫でてくれた。

「お父様…、その、何で？」

ようやく落ち着き、齒切れ悪く聞く。

——漆黒の剣士に助けられた。

そこまで見て目が覚める。

懐かしい夢を見た。

お父様と再会したその日以来、私は姿も見た事無い漆黒の剣士を探している。お父様を助けてくれた恩に貴族として感謝の意を表すのもあるが、何かが私を突き動かすのだ。

8年前、運命が動き出した。

お父さんの死亡知らせが届き、遺品が届き、家族全員が悲しみに打ちひしがれて居た時、お父さんが帰って来た。黒い服装に身を包んだお兄さんと共に。

家族皆でお父さんの帰還を涙し、喜んだ。

黒いお兄さんはそれを離れた所で見、そのまま立ち去ろうとする。

「待ってくれ」

お父さんが声をかける。

「お礼がまだだ。私にできることならばなんでもしよう」

お兄さんは振り返らない。

「今までほったらかしにして来た家族とちゃんと向き合うこと。子供の成長を見守り、いずれ出会う孫の顔を見ることが。そして、幸せな最後を迎えること…、それが貴方が俺にできる唯一の恩返しであり、俺の報酬だ」

「そんなの、君に言われるまでもなく、そのつもりだ。礼にならん」
少し考える素振りをした後、

「そこのお嬢さん、お父さんに何がして欲しい？ 今ならお兄さんの権限で何でも言うことを聞かせてあげよう」

そう、人懐っこい笑みを浮かべながら言う。

私はして欲しい事を思いつく限り、片っ端から言う。

今度は悪戯っぽい笑みを浮かべて

「だそうです。それを叶えて下さい。拒否権は無しですよ」

「…、参ったな、それじゃ今晚だけでも泊っていつてくれないか？」

良いよな？ そうお母さんに言うと、お母さんは泣きながら、それでも笑い、「そうして貰いましょう」と言い泊っていくことになったお兄さん。

「…、ええと、拒否権は？」

「あると思うかい？」

したり顔で言うお父さん。

「デスヨネー」

苦笑いを浮かべるお兄さん。

急ぎよ、晩御飯の準備を大急ぎで始めるお母さんにお祖母ちゃん。私も何かお礼をしたくって、料理のお手伝いをした。お母さん達の作ったのに比べると不格好だった。

食卓に並ぶ豪華な料理の中に私の不格好な料理が入っている。

「さあさ、遠慮なく食べて下さい」

その言葉で食事が始まる。

お兄さんは迷うことなく私の作った料理を箸で掴み、口に入れる。「あ」

思わず声がもれる。

「うん、美味しい。君は良いお嫁さんになるね」

そう言ってくれた。

お母さんは「まあまあ、良かったわね、芳佳」と何処かからかった口調で言う。

そのまま、私の作った料理を全部食べてくれた。

何だろう、胸の奥がポカポカする。

「そう言えば、助けてもらったのに君の名前を知らないね」

その問いでそう言えばと、お母さんもお祖母ちゃんも言う。

「キリトです」

それだけ答えた。

キリトと言う名前は扶桑では珍しい名前では無い。昔話にもその名は出てくるくらいだ。

後で知ったことだが、世界的にも良くある名前みたい。

私は何を思ったのか、物心ついた時に持っていたひし形の物をキリトさんに見せた。

「記録結晶じゃないか、これがどうした？」

どうやらこのひし形の事を知っているらしい。お父さんでもこれが何なのかわからなかったのに。

「記録結晶？　なんだそれは？」

お父さんも首を傾げる。

「そのままですよ、写真や音声を記録しておく物です」

そう言って使い方を説明してくれる。

その日の夜はお父さんと夜遅くまでお酒を飲み合っていた。私も側に居ようとしたが、お母さんに「芳佳はもう寝なさい」と言われて一人部屋に戻った。

布団の中でひし形をいじっていると写真が出て来た。私に似たお

姉さんがキリトさんの頬にキスして、キリトさんが驚いている写真だった。なぜか、酷く懐かしい感覚を覚えた。

それと同時に声が聞こえて来る。

『過去の私へ、これを聞いてるってことは、キリトさんには会えたんだよね。キリトさんは私の旦那様なんだよ…って言っても実感わかないかもしれないけど。もし、見つけたら放しちや駄目だよ。目を離すとすぐにどこかに行っちゃうから』

この言葉を聞いて思い出す。

神様に会ったこと。

それで、キリトさんに会いたいと願った事。神様はその願いを聞き入れてくれたこと。

それから、何度もキリトさんに出会い、別れたこと。中には添い遂げた記憶もある。

何度も忘れて、何度も思い出して。その度に、何でもっと速く思い出さなかったんだろうと後悔していた。

今までの記憶にキリトさんがお父さんを連れ帰って来た記憶は無い。

思い出したのも今回が一番早い。

胸に沸々と感情が溢れて来る。フツツ、キリトさん、貴方を愛しています。

——モウ、ニガシマセン

そう思い、客間に敷かれた布団に入り込んだ。

次の日の朝、「ありがとう」と書かれた紙と宝石が幾つも置かれていた。

キリトさんの姿は無かった。

相も変わらず酷い。

こんなに愛している私を置いて旅立ってしまうのですね。

次に会った時は逃げられないようにことを慎重に運ばなくては。

寝心地

朝起きたら隣でガランドが寝ていた。

何だ、夢か。

再び布団をかぶり直し、瞼を閉じる。

夢の中で二度寝をすると言うのは初体験かも知れない。

それにしても、何故ガランドなんだろうか？

確かにシャーリーにトランシーバー壊されてから連絡手段が無くて、どうしようか悩んではいたが、夢に見る程悩んではないと思つてたんだがな。

…、どうせ夢なんだし胸くらい揉んでも良いかな？

そう思ったが、抱き枕にしよう。眠るんだし。決して俺がヘタレなわけではない。無いったら無い。

あ、良い匂い。どうしていい女は良い匂いがするのかね？

教会で両手を合わせてお祈り。

七日に一度教会でお祈りすると、ささやかながらポーションがもらえたりする。

所謂、ログインボーナスみたいな物だろう。

それよりも、俺の後ろに片膝ついて祈りを捧げている人の群れは何なんだろうか？ そんなに信心深いのか？

教会を新しく作った方が良いだろうか？

でも、こんなに熱心に祈っているのって、俺が祈る時ぐらいなんだよね。

いや、確かに信心深くて教会で祈っている人はいるよ？ でも両手で数えられるくらいなんだよね。

俺が教会でお祈りするのは他にも理由がある。ある程度スキルにバフがかかるので、冒険に出かけようとする時や、緊急クエスト以外のクエスト前にはこうして、祈りを捧げるのだ。

皆にもスキルバフつくのかな？ 冒険に行くんなら俺もついて行っておkですか？

え？ 仕事が終わってないから駄目？ あーあー！ 聞こえない！

そんなことを頭の中で考えながら祈りを済ませる。

祈りを終わらせたタイミングで話しかけて来る人物がいる。

「王、祈りお疲れ様です。神からの啓示はありましたか？」

そんな風に茶化す。

「ユステイーか、そうだな。神からの啓示かはわからないけど、伝染病の正体と対処法はわかったよ」

本当は現実にある知識をこの世界に教えているだけだ。

「まあ、それは心強いですわね」

そう言って、熱の籠った視線を此方に向けて来る。

彼女はユステイーツァ・フォロン・クロステルマン。このアルヴヘイム王国の貴族で、パ・ド・カレーの領主…の筈なんだけど、何時もこの城に居ついている。

「それよりも、パ・ド・カレーは良いのか？ 一応、ブリタニアとの交易の要所だけど」

その問いかけに大きな胸を張って答える彼女。

「心配いりませんわ。信頼できる親族に任せてありますもの」

彼女がそう言うのならば、大丈夫なのだろう。

彼女は、何時も冒険やクエストに付いてくる魔法医ヒールで、レイピアの達人。そこまで考えて、あれ？ と思う。もしかしてアスナポジなの

だろうか？ 胸もデカいし。

今度、スターリイ・ティアー教えてみよう。既にカドラプル・ペインは使えるみたいだし、最終的には是非ともマザーズ・ロザリオを会得して貰いたい。

そう言えば、風の噂で聞いた話なんだが、何でも、剣技で右に出る者はいないらしい、くそ強い王様がいて、その王様の親友に絶剣と言われる人物がいるらしい。

そう、“絶剣”なのだ。もしかしたらユウキに会えるかもしれない。是非ともお近づきになりたいものだ。

その事をユステイーに話したら、呆れた顔をされて、

「本気で言ってますの？」

と言われた。本気も本気。本気と書いてマジと読む位本気。

そう伝えると、頭を抱えて溜息をはかれた。

何か酷くない？

後で知ったことなんだが、その絶剣は病弱剣士で、既にこの世にいない事を知った。経歴もユウキと似ていたよ。しかも、それが少女だと言われて余計にだ。

残念に思いながら今度は教会の外に出て、大樹のある訓練場所に行く。

その大樹の根元近くには一本の片手剣が突き立てられている。無論、赤いバンダナ付きで。ユウキの墓標を俺なりにネタで再現した物で、特に意味は無いのだが、俺が片膝ついて騎士のポーズで拜んで以來、真似る兵士が続出した。

それを知らない新兵がこれなんなの？ って疑問を口にしたので、絶剣と言われた少女が生きた印と軽い説明を交えながら説明したら涙を流しながら剣に頭を垂れた。

いや、ネタでフィクションだからね？ とは流石に言える雰囲気では無くなってしまい、今日まで至る経緯がある。その為、お墓もちやんと別の場所に作った。

因みに、墓標には

——最強の剣士、此処に眠る。

と書いてあり、その下にはEDで流れていた歌の歌詞書いたいた
ら、絶剣は、最強の剣士と同時に詩人でもあると認識されるよう
になった。

時々、思い出して歌って居るのを聞かれて恥ずかしい思いをしたの
を覚えている。

まあ、できてしまった物は仕方が無い。

この国には差別や虐げられていた人たちが多く集う場所だ。勿論、
心に深い傷を負っている人も少なくない。その大半がウィッチであ
る子供だ。生きる意志を失いかけている者、自分なんかが生きて良
いのか思い悩む者。様々だ。ならば、この絶剣の生き様を、そして、最
後に辿り着いた答えを道徳として教え込もうと考えた。

ユウキの答え、『意味なんて無くても生きていていい』と言う事。だ
から、生きて欲しいと。子供たちの手を取り一人一人に向き合ったつ
もりだ。

君達は、石ころでも替えの効く道具でもない。

後は、時間が解決するだろう。

その物語に周りの皆は涙を流した。泣けるもんね、マザーズ・ロザ
リ才編。

そんな話を聞かせ続けて居たら何処かの有名らしい脚本家が、是
非、その話を演劇にしたいと言いついて話を聞かせたんだっけな。

で、できた演劇が完成度。パナかつたんですわ。話だけでここまで完
璧に再現できるとは流石有名脚本家。所々、オリジナルストーリーが入
っているが、それがアクセントになって良い。ただ、その脚本家さ
ん、脚本家であると同時に俳優でもあるらしく、自分が主演で演じら
れなかったのが少し不満だったみたいだ。

まあ、少女がいかにして残りの時間を楽しく過ごすかだもんな。で
も、主役格の眠れる騎士団スリーピング・ナイトの中にあなた居たよね。

そして、有名になると、親戚が増えると言うのはどうやらホントの
ようで、俺の所に眠れる騎士団スリーピング・ナイトの正統なる後継者(笑)が城に来た。い
いや、フィクションだから、存在しないからね？ 特にユウキの直
系の子孫名乗るとかどうなの？

そう思いながら、取り敢えず正当な後継者（笑）がどうしてここに名乗り出るのか問いかけてみたら、騎士団の再建と言う名の階級をよこせとの事だった。ユステイーが、今にもレイピアを抜こうとしていることに冷や冷やししながら証を示せと言ったら、得意顔で何か剣を見せて来た。開いた口が塞がらないとはこのことを言うのか…、多分、王宮に居た皆呆れていたと思うよ。それを勘違いした後継者（笑）は受け入れられたと思ったのか、待遇の事について話し始めた。

やめれ、やめれ。騎士団や貴族たちが凄く殺気出し始めたから。そう思っていたら、遂にユステイーと騎士団が切れた。

はあ、と溜息をはきながら、片手剣を思いつきり投げる。

その剣は自称絶剣の剣に当たり、その剣を真つ二つにする。脆い。

俺の行動に驚いたユステイーに騎士団が止まる。

「どちらの絶剣さんかは存じないが、眠れる騎士団が残したのは未来永劫途絶えること無き剣技なんだよ。それ以外は皆、何も残さずに逝った」

正確にはユウキだけだが。

玉座から立ち上がり隣に立って居たユステイーのレイピアを抜き、構える。

「その剣技の名はマザーズ・ロザリオ。母の祈りだ。本当に彼女たちの正当な後継者ならば、その剣を抜き、剣で語って見せろ！」

そう言いながら、一步、また一步と近づくと青ざめてガクガクと震える自称後継者たち。

「今すぐに引き返すと言うのなら、彼女たちの名を語った狼藉を不問に処す。とつとと失せろ！」

そう言うとも一目散に逃げだした。

「良かったのですか？ 王」

その光景を見届けたユステイーが重苦しい沈黙の中、口を開く。それに「ああ」と答える。そして、レイピアを返す。

「情熱的だなあ♡」

そう言いながら抱き付いて、胸に顔をうずめて寝息を立てるキリトを撫でながら言う。

本来であれば、あれから連絡が無い彼を尋問するつもりでいたのだが、そんなことどうでもよくなってしまった。

それにしても、

「可愛い♡」

何時も凜々しい顔をしている彼と、子供のような寝顔をさらしている彼とのギャップが母性をくすぐる。

いけない、少し濡れて来た。

キリトの頭を抱えたまま横に頭をずらす。

さつきまで、ガランドの頭があった場所にはナイフが突き立てられている。

「いきなり挨拶だね」

そう言いながら、キリトをそっと離すとできるだけ優しく寝かせ、振り返るガランド。

そこにはハイライトが消えた目で此方を睨みつけている少女、サーニヤの姿があった。

「夫婦水入らずなんだ、邪魔者は帰ってくれないかな？」

「寝言は寝てから言うもの、貴方こそキリトと私の愛の巣から出てい

け

キヤットファイト

なにこれ〜。

大きな物音がして起きたら、ガランドとサーニヤがナイフ持ってキヤットファイトしている。

もう一度言おう。なにこれ〜。

まだ寝ぼけているのかと思って目を擦ったが、状況は変わらず、むしろ悪い方向へと動いている。

どうやら夢ではないらしい。

何故、ガランドが此処に居るんだとか、何故、サーニヤとキヤットファイトしているんだとか聞きたいことは山ほどある。が、取り敢えず止めねばならないことだけはわかった。

お互いに本気で殺そうとしている。それがひしひしと伝わってくる。

人間、生きていれば、あい入れない相手と言うのはどうしても出てきてしまう。それは仕方のない事だ。俺も昔、魔女狩りを強行する国とは馬が合わなかった。そのせいで最終的には一对八万の無理ゲーになったし、国境沿いでの諍いは絶えなかった。

だから、目の前の二人が何かしらで相いれない存在となったのはしょうがないが、相手を始末するほどまでに憎み合っているのはなんなんだ？

これ以上考えて居る余裕はなさそうだ。

スキルで素早さを上げて、二人の間に入り込む。

サーニヤの持つナイフを右手で掴み、ガランドの持つナイフも掴もうとしたが、ガランドのとっさの機転で左掌を貫通する。この辺、サーニヤとガランドとの経験の差が出てると思う。

「っー」

痛みはない筈なのに一瞬痛いと思ってしまう。

二人が膠着状態に入ったのは、いきなり俺が間に現れた事か、それとも自身が持つ武器が俺を傷つけたことで正気に戻ったのか。或は両方か。

取り敢えず、

「二人とも頭は冷えたか」

そう言った。

「ああ。ああ。ああああ！」

二人して同じ言葉を言いながらナイフから手を離す。そうだ、それでいい。

その場に力なく座り込む二人。その間に、両手のナイフをアイテムボックスに突っ込む。

この位のダメージならば自然回復でも十分だが、二人が怪我をしていたらいけないので、一応ヒールを使つて置く。

これで大丈夫な筈だ。

なぜ、殺し合いをしていたのかとか、聞きたいことは色々あるが、なぜか胃が痛んで、それを聞くことを本能が拒む。

取り敢えず、飯の支度でもしようと思ひ、その場を動かこうとしたらガランドに手を掴まれる。反対の手をサーニヤが掴む。

次に彼女たちがした行動に驚いた。

二人して、手にあつただろう傷の場所を舐め始めた。

なにそれ、エロい。

そう思うよりも全身に寒気が襲い掛かり、穴と言う穴から冷や汗が出ているような気さえた。

第六感が危険信号を鳴らし続けている。

「あの…、料理したいから離して欲しいんで……」

そこまで言いかけて、包丁を持って殺し合う二人の光景が脳裏に浮かぶ。

あ、これやべー奴だわ。

「外食しに行くぞ、二人とも」

そこで、渋々と言った感じで二人が手を舐めるのをやめてくれる。手を洗ってから外に出る。

うーん、紅茶が美味しい。

テラスの席でなるべく何も考えずに紅茶を口にする。

今もガラランドとサーニヤが笑顔で食後のデザートを食べている。二人とも目が笑ってないが。

この店に入ってからずっとそうだ。時折、テーブルが揺れるが大した問題では無い。

胃薬を頼んだら出してくれないだろうか？ この店。

さつきから、道行く人たちもこっちをチラチラ見ながら歩いている。

それも二人が美人、美少女だから…、では無いんだろうな。

一刻も早くこの場から離脱したい一心で、会計に行こうとすると足を踏んで立たせてくれない。

二人の目が行かせないと熱く語っていた。

転移結晶を使って帰っても良いんだが、二人に場所がバレている。

惜しいような気もしたが、引越越すするか。501の近場で適正な場所探しになると色々とめんどくさい。

何か、使える場所ないかな？ 本当の意味で掘っ立て小屋でも構わないから。

いつその事、テントでもいいかも知れない。テント暮らし何てしたこと無いけど、野ざらしよりはずっと快適だろう。雨風防げるだけでだいぶ違う。

確か、アイテム倉庫にアウロラが使っていた軍用のテントがあったはずだ。そう考えると案外行けるかもしれない。後は場所か…、流石に更地にテント一つ建っているのは怪しいだろう。しかも軍用のテントが。

そう考えると、やはり、森の中が良いだろう。だが、掘っ立て小屋も森の中にあり、更に言うならば、501の近場で森と言うとあそこしかない。どうした物かな…。

「サーニヤあ、ドコに行っただんだ…」

最近サーニヤの機嫌が良い日が続いていた。それ自体は別に気にならなかった。

だが、好きだった筈のペンギンのぬいぐるみがいつの間にかなくなり、集めていた猫の置物もいつの間にかその半数が姿を眩ませていた。

その事を問いかけた時に、サーニヤは捨てたわけでは無いと言っていた。その事について疑っている訳ではない。

ただ、大切な場所に置いてあると言ったのが気になった。

その場所がどこにあるのかだけは教えてくれなかったのが気掛かりだ。

そして、非番の今日はサーニヤと過ごすそうと思っていたのにどこにも見当たらない。

こんなのは初めてだ。

今までだったら、何か一言二言言い残していくか、メモを残して行くが、そのどちらも無い。

取り敢えず、落ち着いて、こんな時こそ得意な占いの出番だ。

「サーニヤはどこだー！」

そう言いながら、タロットカードをめくる。

ラバーズのカードが出て来た。

「……」

無言で無かったことにして、もう一度やってみることにした。

ラバーズ。

ラバーズ。

何度やってもラバーズ。

「ぎ、サーニヤを誑かしたのは誰ダ！」
そう叫びながら基地内を走り回る。

そうしているうちにサーニヤがひよつこりと顔を出す。
だが、少し様子がおかしい。少し不貞腐れているかのような態度
だった。

何処にいつていたんだとか、誰と居たんだと問いただしたところで
返事を返してはくれなかった。

そして、次の日。

夜間偵察任務から帰って来たサーニヤが少し怖かった。

「何で帰ってこないの？ ねえねえ……」

虚空に向かってブツブツ呟く姿を見る機会が増えた。

明らかにおかしい。

「ナア、サーニヤ。悩み事があるなら相談に乗るゾ」

そう問いかけても笑顔で、

「大丈夫、私我慢強いし、辛抱強い方だから……」

としか答えてくれない。

そして、いつの間にか戻って来ているぬいぐるみに猫の置物たちを
前にした時のサーニヤの顔が怖かった。

笑顔なのに笑っていない目で、

「何で？ なんでなんでなんで？ なんで貴方たちは帰って来ている
のにキリトは帰ってこないの？ 何でなんでなんでなんでなんで
んで？」

そうペンギンのぬいぐるみに向かって呟き続けている。

気になる単語が聞こえた気がしたが、それどころでは無かった。

空の魔王

掘っ立て小屋を跡形もなく解体して、森の中の獣道的な感じの場所にテントを張っている。此処ならば森の上からは絶対に見えないし、入り組んでいるので、ストライカーユニットを履いて入っては来れないだろう。

探知魔法を使うサーニヤにばれないように隠ぺいスキルを使っている。

更に言うならば、掘っ立て小屋の建って居た場所からそんなに離れていない。灯台下暗しという奴だ。まさか、姿を眩ませた人物が同じ森、しかも、住んでいた場所の近くに居るとは誰も思うまいよ。

それよりも、掘っ立て小屋を壊す際にサーニヤの私物を501のサーニヤの部屋に運んだんだけど、それ以来寒気が止まらない。

『貴様、聞いているのか！』

「そんなに声を荒げなくても聞こえてるよ」

ガランドが置いて行った通信機を片手に答える。何でルーデルが通信機のコード知っているんだよ。しかも、口悪し。

昔はあんなにいい子…、でもねーわ。昔から男の子顔負けのやんちゃガールだったわ。

毎日家来ては、勝手に牛乳飲んでいたっけ？

それが今では、泣く子も黙るスーパーエースだもんな。

「言つとくが、牛乳なら無いぞ」

『やはり貴様聞いていなかったな！』

まあ、こいつが何を言いたいかは既に把握できている。

クエストログに第2急降下爆撃航空団第104飛行中隊とのネウロイ共闘の文字が出ている。失敗条件は…、ルーデル、アーデルハイド、ニールマンの敗北。

あれ？ ニールマンって新聞記者だよな？ …、あの娘、苦勞しているな。後で何か差し入れてあげるか。

「わかってるよ、ネウロイを倒しに行くんだろ？ 今はまだ作戦考案中って所か？ どちらにしても今、ブリタニアに居るんだ。そっちに

つくまで待っていてくれ…、そうだ。新聞記者を余り虐めてやるなよ」

『おい、さて。どうしてその事を知っている…』

音量が一気に増してうるさかったので通信を切った。

舌打ちをして通信機を投げる。

それを、後ろに居たアーデルハイドがキャッチする。

「妖精王に振られましたか？」

「よ、妖精王？ 暗号か何かですか？」

アーデルハイドの言葉にニールマンが首を傾げる。

そう言えば、こいつは知らないんだったな。そう思うと、少し、気分が晴れた。

左手の薬指に嵌められているリングをそつと撫で、手の甲を抓る。

これは奴から貰った大事な指輪だ。と、言っても奴から直接左手の薬指に付けてもらった訳ではない。そこが、もどかしくもあり、腹立たしくもある。

奴の、キリトの家で見つけ、無理を言っただ半ば強引に貰った指輪。

幼少の頃よりお守りとして大切に肌身離さずに付けていた。この指輪を付けているとキリトに守られている気がするのだ。一度だけ外して出撃したら顔に大きな傷を負ったしな。

「いや、来てくれるらしい。ただ、少し時間がかかるとの事だ」
不機嫌さを隠さずに言う。

そんな私にアーデルハイドは黙って牛乳を差し出す。

「では、作戦は遅らせる方向でよろしいですね？」

「ああ、各員に伝達してくれ」

それを聞くと、アーデルハイドは「失礼します」と言っ出て行った。

沈黙が支配する。特に言う事もない。牛乳を飲みながら左手の薬指をじーつと眺める。

「既婚者…、だったんですね」

沈黙を破ったのはニールマンだった。

既婚者…、既婚者か。良い響きだな。あいつと夫婦か。悪くない。その問いかけに「まーな」と返して置く。

いずれ、私が頂く存在だ。嘘にはならないだろうし、嘘にする気は更々ない。

ニールマンは目を輝かせて矢継ぎ早に問いかけて来る。流石に鬱陶しかったので銃を撃つたら「ぶ、プライベートも大事ですよね」と黙った。

それにしても、と思いつく。

キリトが考えた答えについて。

正義と平和について考えた結果、キリトは自身を不要だと言った。

それは、過去に自身が築いたアルブ Heim 王国に平和が来たのが自身を眩ませてからだからなのか、それともアルブ Heim 王国が三つに別れた結果を見て、そう結論を出したのかはわからない。

だが、それは昔の話だ。今はネウロイと言う人類共通の害悪が居る。

そして、世界平和のためには、何度考えてもキリト奴が必要であった。それが、私が出した答えだ。

夜が落ちてくる。

一週間が過ぎた。

奴が来る一足前に出撃することにした。

昨晚、通信機で話した時に後1日あればこちらに合流できると言っていたからだ。

奴ならば1日ぐらい短縮して来てくれるだろう。それに、敵もこれ以上は待つてくれないみたいだしな。

「待ちに待った出撃だ。アーデルハイド、準備をしろ」

「よろしいんですか？ 到着を待たなくて」

「ああ、構わん」

下手に隊員に会わせて、奴がそいつら^{ウイッチ}の尻を追いかけるのもつまらんし、隊員が奴になびいても面白くない。

出撃する。

ニールマンには前もって出撃することは告げてあったので、動揺は余りなかったが、乗り気でもないようだ。

それなのに律儀についてくるあたり、根性がある奴だと思う。

それでも、何かブツブツ言いながらふらふらと飛び、我が精鋭部隊に五月蠅いと文句を言われているが。

「大佐、先遣部隊から進路を確保したと…、それから黒いローブ姿の人物が凄まじい速さでネウロイを駆逐しているとの報が」

アーデルハイドの言葉に口角が吊り上がる。

「よし、目標は敵地上ネウロイ群。奴らに悪魔のサイレンを聞かせてやれ！」

隊員たちが一齐に急降下し始める。

爆撃音が響く中、インカムに聞き覚えのある声が響く。

『ちよ、ルーデルさん！ 俺がまだ下に居るのわかって爆撃してるだろう！ 俺に何か恨みでもあるんですか?!』

「何？ うるさくて良く聞こえんな。それに、その位で貴様はくたばったりしないだろう」

戦場で軽口を叩き合える。対等で同等。空の魔王と呼ばれ、恐れられている私に対してもそれは適用される。

それが、どうしようもなく嬉しかった。

感情は昂ぶり、敵陣に向かって突っ込んでしまう。

アーデルハイドが急いで追いかけて来る。

ネウロイを10体程倒したところで被弾しかかる。アーデルハイドでは間に合わない。

一歩間違えば死。そうでなくても死。

それでも笑って居られるのは…、

体が急に持ち上がる。

「何バカやってんだ？ お前。アーデルハイドもちゃんと面倒を見てくれよ…」

そう言いつつ呆れながら私をお姫様抱っこしているキリト。

少し濡れた。

「五月蠅い！ 今日は一番搾りの牛乳を飲み忘れたからこうなったのだ。飲んでいれば、こうはならなかった！」

照れ隠しにそう言う。

「はあ、もういい。それよりも、ボスのお出ました」

そう言って指さされた方向には、大量の小型ネウロイを生み出しつつ前進してくる戦車の形をした、超大型ネウロイの姿。

「俺が引き付ける。ルーデルは俺に引き付けられたネウロイを頼む！」

それだけ言うと、私を投げて凄い勢いで敵陣に突っ込んでいく。

私にバカと言っておきながら自分はこれか。

そして、どういう原理か知らないが、敵が奴以外見えていないかのようにな奴を集中攻撃し始める。

此方に対する攻撃が完全に止んだ。

我が精鋭隊も流石に呆気に取られている。

「何をやっている！ ネウロイを蹴散らすぞ！」

私の声で再び精鋭隊もネウロイ殲滅に加わる。

奴が持っている剣が輝きだす。

青、緑、オレンジ、水色、赤、紫、二つの剣から色とりどりのエフェクトが戦場を走り抜ける。

光と剣技の芸術。

その芸術的な攻撃の前にネウロイはなすすべなく、消滅していく。

体が火照る。

口元が緩む。

伝説に言う妖精たちの王の力。

あらゆる怪異を断ち切る、破邪の剣技。

それと肩を並べて戦えるのが誇らしくって、私は笑いながら敵に突っ込む。

お前は否定したが、やはり、世界平和にはお前の力が必要だ。キリト。

「なあ、キリト。賭けをしよう。先にあの戦車のネウロイを倒した方の言う事を何でも一つ聞くと言うのはどうだ？」

そう口にする。

「じゃあ、俺が勝ったら新聞記者に口止めな！」

それを聞き届ける途中で戦車型の砲身内部に突っ込む。

「あ、反則だぞー！」

そう聞こえた気もしたがもう遅い。

突っ込んだ勢いで、体をあちこちにぶつけて、ストライカーユニットも壊れてしまったがそんなのはどうでも良かった。

実の所、アーデルハイドにニールマンの口止めは命令している。

部の悪い賭けは嫌いでは無いが、今回に限り例外とさせて貰おう。

そして、二重の意味で賭けには勝つ！。

「扶桑の古い言葉にはこんな言葉があるそうだ。『肉を斬らせて骨を断つ』とな」

銃に弾を込めてゆっくりとコアに向かって歩く。

「私の勝ちd…」

そう言いかけた時に一本の剣がコアを貫通する。

「俺の勝ちだ、反則もの」

北郷直葉

私の名前は北郷直葉：ではなく、今は北郷章香と言う名前。

仏教に言う、輪廻転生と言う物を経験した者だ。

太古の昔。

私は生贄として神に奉げられて短い一生を終える筈だった。

そこに、颯爽と現れた神の使者。後の世に言うウィッチ達の護り神。それが、私が敬愛し、兄と慕い、恋し、愛した愛しい人。キリト。

直葉と言う名前もキリト兄さんから付けてくれた物。それよりも前の名前は生贄として奉げられた時に捨てた。

幼かった私を育ててくれた兄さん。

一人で生きていけるように、兄さんは色々な知識や武術、特に剣を教えられた。

当時、まだ青銅でできた剣が主流だった中、青銅よりも軽くて丈夫で、魔力を良く通す鉄の剣を作り、武器に革命が起こした。

その噂は、海を越え大陸にまで轟き、大陸からその技術を学ぼうと使節団が派遣され、弟子入りした人達で家がにぎわった物だ。

その頃には私もそこそこ成長し、巷では劍豪としても、美人として有名であった。

弟子入りしてくる人の中には、私目当てで来る者も居た位だ。求婚されたのだから一度や二度ではない。

女としての腕に磨きもかけた。料理に洗濯掃除、弟子たちのご飯を作っていたのは私だ。まあ、兄さんの腕には叶わないが。

それでも、妹として愛してはくれているが、私が望む恋仲に発展することは無かった。

思いは募るばかり。

遂に我慢できずに、大陸の商人から睡眠を深くする薬を手に入れ、兄さんの晩御飯に混ぜて出し、夜中、兄が深い寝息を立てているのを確認して、契りをおこなった。

懐妊したと言った時の兄さんの顔は面白かった。普段は落ち着いた物腰なのに大慌てで、相手は誰なんだ！　っと聞いてきて、流石に

素直に話す事は躊躇われたので、沈黙を貫いていたら、私に比較的親しい弟子たちに問い詰めはじめたが大変だった。

最終的には私がこの子を産みたいと真剣に言ったら、直葉が良いならと渋々であったが受け入れてくれた。

その事が嬉しくて、その日は舞い上がっていた。

その後も、生まれて来た子供を育てると言うのは、予想よりも遙かに大変であったが、それ以上に楽しくもあった。兄さんと私の愛の結晶。兄さんと私の名前から切葉と名付けた。

その子もやがて大人になり、子をなし、孫ができ、家族皆に見守られながら幸せな最後を迎えた。心残りなのは神の使いである愛しい人は老いることは無い。そんな人を一人残して逝くことだった。

気が付くと果てしなく白い場所に居た。

そこで、神を名乗る意思と相対した。私が望むのは一つだけ。愛しいキリト兄さんとの再会。今度こそちゃんとやり直したい。夫婦として添い遂げたい。

私の願いは承諾された。

そして、北郷章香として二度目の生を受けた。

生を受けて数年、北郷と聞いてまさかとは思っていたが、どうやら切葉の子孫たちがちゃんと生きて今日まで続いていることに安堵した。ちゃんと北郷の家を護ってくれていたのだな、と。

キリト兄さんが私のために魔力を込めて打ってくれた剣が家宝として残っているのも、間違いは無いだろう。

それと同時に心配になる。私が、直葉が終わりを迎えてから既に3000年以上の月日が流れていることに。

てつきり、キリト兄さんは北郷家を見守っていてくれる物だと思っていた。私の子孫たちを見限ったのか、それとも……、どちらにしろ、キリト兄さんがすぐそばにいない。その事実が私の心をえぐる。子供の身ではできないことには限度がある。

とにかく、自身を鍛えることに専念した。そうしている時だけはキリト兄さんに見守られているようで安心できた。知識も蓄えた。こ

の時代、外の大陸に行くのはそう難しいことではないと知ったからだ。

父親には悪いとは思ったが、軍に入ったのは、その志を継ぐためでは無く、世界のどこかにいるであろう最愛の人を探すためだった。無論、怪異に怯えている人々を蔑ろにできなかったのも事実だ。

キリト兄さんの情報を手に入れられないまま、月日だけが過ぎていく。

本当にこの世界にキリト兄さんが居るのかと本気で悩んでいた時に、教え子の中で特に才能を持った子。徹子が急激にその腕を高めていた。その姿に、時折、キリト兄さんの姿が重なるのだ。

その事について問いかけたところ、キリトと言う二刀流の剣使いが指南してくれているとのこと。

間違いない。キリト兄さんだ。

私は興奮する心を抑えて、その人を今度道場に連れて来てくれと言う。その日は興奮して眠れなかった。

次の日、徹子が連れて来てくれた。

その姿は3000年経った今も変わることなく。黒い服装に身を包んでいた。間違いない。キリト兄さんだ。

今すぐにも抱き付きたい衝動を我慢して、竹刀を二本投げ渡す。その行動にキリト兄さんの眉が少し歪む。

余り褒められた態度では無いのは確かだが、そこは我慢して貰おう。

貴方の育てた剣はこんなに立派になったと見せたかったのだ。

キリト兄さんは一本だけを掴む。もう一本は背負ってしまおう。様子見と言う事だろうか？ それとも余裕の表れか？ その事に少し思うこともある。私だって強くなっている筈だ。

構えすら取らないキリト兄さん。

試合初めの合図が出ると同時にトップスピードで連続の突きを繰り出す。

それを兄さんのはのりくらりとかわす。

兄さんが動く。一瞬で距離を縮められ、足を滑らせてしまう。その隙を兄さんが見逃すはずもなく、下からの切り上げが迫る。それをバク転で何とかかわすが、大きな胸の下部分にかすってその部分の布地が切れた。

兄さんから距離を取る。追撃はしてこなかった。

兄さんにはこやかな顔で少し首を傾げる。…、もう終わりか？　そう問いかけてられている気がした。

わかつていた事だが、強い。でも、此処で引いたら劍豪の名が廃る。私はもう一本の竹刀を構える。兄さんの真似事だ、技は昔見て覚え

た。深呼吸して前を見据える。私の様子が変わったことに気が付いたのか初めて構える兄さん。

再び私から仕掛ける。

竹刀同士がぶつかる。相手の攻撃を受け流しつつ逸らすことで少しだけ、隙が生まれたが兄さんはすぐに体勢を立て直し、お互いに有利な位置取りに入る。剣戟の合間に驚いた顔を見れたのが嬉しかった。

しばらく打ち合いになったが、少しづつ攻撃がかさるようになった。

それでも、ああ、なんだろうか…楽しい、楽しいなあ。

でもこのままでは決め手にならない。

勝負を仕掛ける！

——燕返し

しかし、神速の三連撃を兄さんは見切り、反撃をしてきた。

竹刀に向けて十字を切るように攻撃。そのまま十連撃竹刀に叩き込まれて竹刀を両方とも落としてしまう。

そして、最後の一撃が私めがけて迫る。回避することは不可能。

強くなったつもりでいたが、兄さんにはまだまだ叶わないな。そう思っていると竹刀が私の腹寸前で止められる。

「技の名前はマザーズ・ロザリオ。神速の十一連撃からなる技…、永久

に届かぬ友の剣だ」

「そう言い聞かせるように呟く。

母の祈りと名付けられたそれには一体どれ程の思いが込められているのだろうか？

それにしても、兄さんでも届かない剣技が存在することが驚きだ。

「大丈夫か？」

「そう言っつて、技の気迫に押されてへたり込んでいた私に手を差し伸べてくれる兄さん。やっぱり変わらないな。

時を経ても変わらぬ兄に安堵する私。

「そう言えば今世での名をまだ名乗っていないのを思い出した。本当は直葉だと言いたかったが、なぜ妹の名前を知っているのかと不審に思われては嫌だし、よしんば、信じてくれたとしても、それはそれで、前世みたく一生妹扱いのままな気がする。

「名乗り遅れたな、私の名前は北郷章香。良ければ名前を教えてくださいませんか？」

「キリトだ、よろしく頼む」

「そう言っつて差し伸べられた手をとる。

「今度は絶対、ハナシマセン。」

ぬけがけ

このゲームが始まってからどれだけの月日が流れたのだろうか？

ふと、立ち止まって振り返る。ゲームオーバーになつてはクエストを初めから繰り返し、その度に皆とは初めましてを繰り返した。

ゲームだとわかつていても、仲の良かった仲間顔に顔を覚えていて貰えないのは心に来るものがあつた。何度も何度も出会いと悲しい別れを繰り返して、その度に心を殺して。

これはゲームだと、そう自分に言い聞かせてバカを貫き通してここまで来た。

昔はあんなに月が大きかったのに、時代が発展するたびに小さく、遠くなつていくような気がした。それが、自分の心境に重なつて見えて何とも言えない郷愁感にさいなまれる。

オラーシヤ帝国には余り良い思いでは無いけど、502のメンバーとの思い出は楽しい物だつた。

二パと直枝とひかりがストライカーユニット壊して、サーシヤに怒られて。あれ？ まだ、今の時期はひかりは居ないんだっけか？

伯爵こと、ヴァルトルートが俺によくワインねだりに来て、その度に女の子なんだから少しは加減しないと云つて、結局なぜか、酒を飲む前から顔を真っ赤にしてワインをちびちび飲む伯爵。

普段はビンでラツパ飲みする癖に何で俺と一緒にだちびちび飲むのかね？

物静かで何考えて居るのかわかりずらいけど、一番乙女なラル。

料理が大好きで博識な定子。実は料理の師は俺だったりするのだけれど……、それを美味しそうに食べる見た目騙しの大食いジョゼ。これ言うと本人に顔を真っ赤にして怒られるんだけど。やっぱり、女の子に大食いはNGなのかね？

アウロラは……、まあ、まあ、そうね。

厳しさの裏には人一倍優しさを隠した先生ことロスマン。

十人十色と言うが、ここまで個性的な部隊と言うのも珍し……、くも

ないな。エースは皆、こうなのか？

「だーれだ」

ペテルブルグの街は既に破棄されていて人は一人もいない筈だ。真っ暗になった視界からの情報は無いけど、聞いたことのある声だった。

「ヴァルトルート？」

「正解。さすがはキリトだね」

振り向いた先には、ショートボブの髪型ではなく、セミロングくらいまで伸ばされた髪の毛。はて？ 前回あつた時にはまだ髪の毛が短かった筈なんだけど…、好きな男でもできたのだろうか？ あの、女好きなヴァルトルートがねえ。人生、何があるかわかったもんじやないな。

「髪、伸ばしてるんだな」

「えへへ、似合う？」

「ああ、よく似合ってるよ」

元々モデル顔負けの美人なのだ。どんな格好をしても、余程あれな格好でない限り似合うだろう。

俺の好みで言うなら、もう少し髪の毛長い方が好みだが。

それにしても、ヴァルトルートが覚えていてくれたのか…、やっぱり何か特殊条件が整うと記憶が解放されるのか？ 前回は覚えてなかったし。

「隣に失礼するよ」そう言って隣に座るヴァルトルート。何時ものようにワインをねだられると思っていたが、ねだっては来なかった。

その代わりに、ヴァルトルートの豊満な胸へと抱きしめられる。

驚き、あたふたしていると、ヴァルトルートが口を開く。

「キリトはさ、何でも一人で背負い過ぎなんだよ。背負わなくていいモノまで背負ってさ」

そう…、なのだろうか？

ヴァルトルートが言うのならそうなんだろうな。SAOの本物のキリトと違ってこっちは真正銘のボツチだ。未だにフレンドゼロだし。仲間ができたと思っても、次のクエストを進行している間に数

十年の時間が経過したことになって居たりで、仲間と呼べる仲間は居なかった。

必然的に人に頼ると言う行為は余りできなくなったし、しようとも思わなかった。

一人、攻略の鬼となり突っ走り続けた事もあった。その時は楽しさ何て二の次だったしな。

そうか、いつの間にか疲れ果てて自分どころか、足元さえも見えなくなっていたとは…、潮時かな。止めたくてもやめられないのだけれども……、

だが、今更それを下ろせと言われてもどうすれば良いのかわからない。下手な意地を張り続けているわけでは無く、本当にわからなくなってしまうているのだ。

こういうのを生き方下手と言うのだろうか。

思い返せば、現実世界でも生き方は上手い方ではなかったな。キリトになったことで多少は変わったかと思っていたのだが、そうでもないらしい。

「だからさ、その、何だ…」

急に歯切れが悪くなるヴァルトルート。なんだかおかしく思えてついつい、笑ってしまう。

何時も女を口説いている時はこんな歯切れ悪くならないのにな。

「むう、なにさ。〃僕〃がせっかく心配していつてるのにさ」

どうやら、へそを曲げてしまったらしい。

それに対して「ごめんごめん」と謝り、月を見る。

「ありがたいな、ヴァルトルート。いくらか肩の荷が下りたよ」

「ふふ、どういたしまして」

最近、二パちゃんも直ちゃんも様子がおかしい。

それに対して思う所はある。

あーあ、“今回も”独り占めはできないか。

無意識に手に力が入る。

それにしても、あの天然女たらしめ…、女の子好きだった僕をこんなにも女にしておいて、自分は他のウィッチの所へ行ってしまうなんて。

今頃、顔も知らない女と仲良くしていると思うと腹立たしくてしようがない。

自棄酒しようにも、どうも以前よりも酔えないし、飲めない。

どうしてもキリトに言われた言葉が頭の中でリフレインしてしまう。

『女の子なんだから加減しないと』

僕を女の子扱いするのはキリト一人だった。

料理だってやらないだけでキリトの好みの味付けもできるようになった。

一度、他の皆が記憶が戻っているかどうかの確認で料理を作ったことがあった。

隊長と先生、サーシャちゃんが驚いた顔して、食べてまた驚いていた。あの三人は記憶が間違いなく戻っている。

まあ、相手もこのことで僕に記憶が戻っていることに勘づかれてるだろうけど。

今度あったら監禁でもしておこうか…、駄目だ。残念だけど僕一人じゃキリトを監禁できない。キリトは様々な魔法を使えるし、転移結晶とか言う宝石を使って一瞬で想像もできない距離を移動できる。

それで、何回も逃走されているし。

結局、既成事実に至るまでキリトを縛り付けることはできなかった。でも、今すぐにそういった行為をすることはできない。

やはり、軍に入ってしまったのが間違いだっただか？

だが、軍に入らなければキリトに出会うことは叶わない。少なくとも502に居れば部隊解散までにキリトは必ず来てくれる。

それに、キリトに深くかかわるであろうウィッチ達には記憶が戻っても余りキリトにいい印象を与えないためにダメな方に性格を誘導していた。

今、501に居るエーリカ・ハルトマンは、生真面目な性格から180度反対の墮落した性格に変化するよう誘導して成功した、数少ない成功例だったりする。バルクホルンは堅物でどれだけ墮落させようとしてもしなかつたが、マルセイユも墮落はしなかつたが、キリトの嫌いな煙草を吸うようにはなつたから、それはそれで良しとしよう。

まあ、キリトはその程度で人を嫌ったりするような性格では無いが、多少の優劣くらいなら付けるだろう。自分が少しでも良い位置にいたいと思う乙女心だ。

そんなことを考えながら、今日も今日で、飽きずにしんしんと降り続く雪を見ながら銃の整備をしていた。

何となく空を見上げた時に、変化があることに気が付いた。

ペテルブルグの街の上だけ円形に雲に穴が開き、月明かりが差し込んできた。

不自然なその光景に素早く銃を持ち、ストライカーユニットを履く。サーシャちゃんにどうしたのか聞かれたが、ちよつと気になることがあると言ひ残して返事を聞かずに飛び出した。

何かあるのら対応し、取り越し苦労ならそれはそれで構わない。

穴の下には月明かりに照らされている一人の人物が居た。

「…、えっ？ 嘘」

何で？ どうして君が此処に？

今までの記憶ではこんな時期に彼が此処に姿を現したことは一度

として無かった。

銃を捨て、ストライカーユニットを脱ぎ捨て、声をかけようとして、伸ばそうとした手を止める。

キリトの背中は今まで見たことが無い。郷愁に満ち、泣いているように見えた。初めて見るキリトの弱々しい背中にどう声をかければ良いのかわからなかった。

よくよく考えれば、娘が悩んでいる時に良くこんな背中をしていたのを思い出す。あの娘の落ち込み方はキリトに似たのか。ならば、あやし方も同じので通じるかもしれない。

「だーれだ」

あえて、お茶らけた態度で話しかけつつ、目隠しをする。

「ヴァルトルート?」

その返事で満足する。他の女の名前が出てこようものならば、持っていた拳銃で頭を撃ち抜く所だった。

「正解。さすがはキリトだね」

振り返ったキリトは驚いた顔で、

「髪、伸ばしてるんだな」

と言ってきた。キリトは長髪で巨乳なのがタイプなのを知っている。

「えへへ、似合う?」

「ああ、よく似合ってるよ」

こういう、こっぴড়াずかしい事を真顔で言うのは相変わらず反則だと思ふ。ドキッとしてしまう。

少し赤くなった顔を誤魔化すように隣に座る。

隣に居るキリトの頭を掴んで、自分の胸に抱きしめる。

「キリトはさ、何でも一人で背負い過ぎなんだよ。背負わなくていいモノまで背負ってさ」

そう言うと、あたふたしていたキリトが大人しくなる。

「だからさ、その、何だ…」

僕にもその荷物を背負わせて欲しい…。そう続けたかったが、いざ、言葉にしようとしたら中々口にできない自分自身にイライラす

る。

せつかく、他の女と距離を離すチャンスなのに！　こと、夫婦の夜の営みをする時でさえこんな風に言葉に詰まる事は無かったのに、どうして肝心な所で言い出せないかな、僕は。

そう考えて居たら、キリトに笑われた。

流石に笑うことはないだろう。僕からしてみれば、一世一代の告白なんだから。

不意に笑い声が止まる。

「ありがとうな、ヴァルトルート。いくらか肩の荷が下りたよ」

……、本当に、僕はこんなにもこの人の事が好きなんだな。

はやくなる心音が不思議と心地よい。

「ふふ、どういたしまして」

「……、なあ、ヴァルトルート。もう少しこのままで良いか？」

「そんなに気に入ったの？　僕のこれ」

「ああ、久しく……」

その後の言葉は聞こえなかった。

懐かしい夢を見た気がする。

こんなに安心したのはいつ以来だろうか？

目を開けてみると、ヴァルトルートの胸の谷間に顔を埋めて寝ていたようだ。

これが…、これが巷で流行っているバブみという奴か。そんなバカな考えを破棄する。

甚兵衛？ みたいなのを着て寝息を立てているヴァルトルート。

丁度胸の辺りだけ大胆にはだけ、形の良い双子山の天辺があらわになっ
てしまっている。

——ゴクリ

はっ、いかんいかん。

頭を振るってピンク一色になりつつある思考を追い出す。

取り敢えず、布団被せるか…。

ヴァルトルートに布団を被せ、ベッドから抜け出す。

部屋を抜けると、やはりと言うべきか502基地内部だった。

そう言えば、今の俺って部外者じゃん。見つかつちやまずいんじゃないのか？ しかも、ヴァルトルートと定子以外俺の事知らないだろうし。

そう思うと、よくヴァルトルートは俺を見つからずに部屋へと連れてこれたな。

このまま部屋に戻ろうかとも考えたが、俺の理性が持つかかわらないし。

突然、後ろから来た殺気に身を逸らす。

パン！

乾いた音が響き、頬を何かがかする。

剣をリコールすると赤い線が俺を捉える。弾道予測線！

まあ、GGOのスキルも使えるから予測していたが、本当にあるんだな。銃を向けられて、尚且つ撃たれることは無かったからわからない

かったよ。

にしても、急に問答無用で撃つて来るなんてな。誰がやったのかは大体想像が付く。

やっぱりアウロラ苦手だわ。俺、彼女に恨まれるような事したっけか？

近場の窓を割って外に出る。こういう時に空飛べるのって便利だよな。

「待て！ キリト・アデルベルカ・アルブ Heim！」

そう叫んで来るアウロラ。確かにキリトだけど、何その名前。多分別人だと思うよ？

銃声のせいで、基地内部が騒がしくなってきた。この基地には無論ウィッチ達だけではなく、他の兵士たちもいるわけで……、見張りだろう兵士たちが此方に向かって銃を構えている。

当たる事は無いと思うけど、逃げにくい。

その時、目に入ったのは、ウィッチ専用のサウナだった。

あそこなら、今の時間使うウィッチは居ない筈だし、他の兵士たちも入った所を見ていない限り近づいては来ない。

誰も見ていないのを確認して、サウナに入る。

後は転移結晶を使うだけ……、そう思い、アイテムストレージから転移結晶を取り出して使おうとしたら、後ろから手が伸びて来て転移結晶を奪う。

驚いて声をあげようとしたら、口を抑えられる。

「今、此処で声をあげたらバレちゃいますよ？」

そこにはタオル一枚でいる定子の姿が。

「あの、定子さん。その転移結晶を返して頂けると大変ありがたいのですが……」

ついでに目のやり場にも困ります。

「ダメです♡ 師匠が他の宝石を使おうとしたら、私、抱き付いて叫んじゃうかもしれません」

鬼かつ！

流石に抱き付かれた状態で転移結晶を使ったら、定子も巻き込まれ

るだろう。そうなったら色々面倒だ。

「あく、それで、定子は何を(ご)所望なんだ」

しょうがないので、定子の願いを聞くことにする。……なるべく定子を見ないようにして。

「もう、師匠は女の子にそんなことを言わせるつもりですか？」

そう言つて、潤んだ瞳で見上げて来る。段々と顔が近づいてきて……。

俺は急いで定子を押し倒す。

「あん♡ 師匠大胆です♡」

次の瞬間、さつきまで頭のあつた場所を何かが通過する。

押し倒した衝撃で定子の体を隠していたタオルがはだけ、生まれたままの姿になった定子。

だが、それをきにしてられない。

冷や汗がダラダラと流れる。

「ほう、今のをかわすか。鈍つてはいないようで安心したぞ…キリト」
そこには手にナイフを持ってハイライトの消えた目で此方を見るラルの姿があつた。

なぜか、マツパで。

こんな状況でなければゆっくりと眺めたい、むしろ色々したいところ…ゲフンゲフン。

取り敢えず不味い状況だと言う事だけは理解できた。

「……、人の情事を邪魔するなんて無粋ですよ、隊長」

「フ、笑わせる。貴様の貧相な体でキリトを満足させられると思つて居るのか？ それに人の旦那にちよつかいを出す虫を放つておくわけにはいかんからな」

二人の間で火花が散つてるような気がする。

定子は凄い顔をして歯ぎしりしているし、ラルは勝ち誇つた顔をしてる。いや、いつもの無表情なだけけれども雰囲気かね。

ん？

そう言えば気が付いたのだが、定子は雑学や料理を教えたりしたから憶えている知つているのは当然として、まだ、今回はラルとは会つ

ていない筈だ。そして、ラルの物言いから俺の事を憶えているようだし、何かしらのキーがあるのか。本当にこのゲームはよくわからん。

アウロラは唇を強くかみしめていた。

キリト・アデル・ベルカ・アルブヘイム。魔女狩りを舞台にした物語の主人公で、実在したとされる賢王。

ここ、オラーシャ帝国ではアルブヘイム王国と度々衝突していて、その漆黒の姿から悪魔と呼ばれているウィッチ達の守り神。

小さな頃、よく最愛の妹のエイラと一緒に遊んでもらった物だ。と言っても、その頃にはそのことに気が付かなかった訳だが。

それから、何回も添い遂げた、異性で愛した唯一の人物でもある。キリトの子供をこの腹に宿すためにあれ程好きだった酒も辞めた。それも、何回も前の人生でだ。

この基地に居ればキリトに会えるのはわかっていた。だが、こんなに速くこの地を訪れたのは今回が初めてだ。

キリトを目にした瞬間に胸がときめき、体が火照る。

それと同時に、頭のどこか冷静な部分が訴えて来る。キリトの出て来た部屋はウィッチの部屋だ。

頭の中で何かがぶちぎれる音がした。

ナンデ、ナンデワタシヤ、エイラヤニパイガイノオンナノハヤカラキリトガデテクル？

気が付いたらキリトに銃口を向けて発砲していた。

完全な不意打ちなのに平然とかわすキリト。

2 発目、3 発目は虚空から出て来た剣により弾かれる。

怒りの感情を込めてキリトの名を叫ぶ。

「キリトは窓から逃走していった。」

もう発砲に意味はない。と言うよりも、キリトを私だけのものにし
ようとして、両手両足を切断して監禁した事があつたが、何事も無
かつたかのように普通に脱走していた。切断した筈の両手足も元通
りに生えていたし。

夢

私は奴隷でさえ、自らの国に来た者に人としての権利と自由を与え、自分のことは二の次で信心深く、異なる文化を尊重し、冒険好きな賢王。

キリト・アデル・ベルカ・アルブヘイム様を深い尊敬の念と感謝の気持ちで仕えていた。

勿論、その裏に秘めた激情には蓋をして。

私の先祖は、商人であり、又、王に教えを乞うたウィッチだと聞いている。

その商人としての才と、ウィッチとしての才を買われて今の地位を築いたのだとか。このアルブヘイム王国は自由の国。平民でも才を買われれば成り上がることができる。

ほかの国にはない高等教育を施し、高度な知識をつけつつ、専門職も数多く存在する。そのため、この国の技術は他国とは一線を引いている。他国はこの技術を学びたいと使節団を送り込む程だった。それでも王はそのことを鼻にかけることも誇ることもしない。あくまで自分は「当たり前前のことをやっているだけだ。誰に誇れることでも褒められることでもない」と言う。

商人としての一面を持ち、外国を知っている身としてはこれ程素晴らしい国は世界中を探してもアルブヘイム王国だけだろうと胸を張って言える。

ここ最近是我的領地であるパ・ド・カレーに戻らずに、王の補佐をしている。

東の方の国々で魔女狩りが起こっていた。魔女狩りを逃れるためにウィッチを持つ家族連れがこの国に逃げ込んできたのだ。王はこの難民の受け入れ手続きに追われている。

難民キャンプを作り、近い人たちを選別してそれぞれの適した土地の村長なり、貴族なりに受け入れるように手配書を書く。

「王、そろそろお休みを。これ以上はお体にさわりましてよ?」

私の声掛けに王は「もうそんな時間か、先に休んでいいぞ、ユス

「ティー」と言つて手を止めることはない。私はため息をつく。紅茶と茶菓子を用意するために玉座の間を後にする。

途中、メイド数名が「おやめくください、紅茶なら私どもが入れてお持ちしますので」とオロオロしていたが、これくらいのことでは自分でできると突っぱねた。第一、他人にやらせたのでは私の忠誠心が注がない。紅茶を入れ、王に差し出すほうにいつものように指を少し斬り、血を二、三滴入れて直ぐに治癒魔法で傷を治す。

「王、紅茶が入りましたわ。速くしないと冷めてしまいましたよ？」

玉座の間で政務に励んでいる王に遠回しに休めと伝える。それを感じ取つてか、

「いつも悪いな」

そう言つて紅茶を口にする。間を開けて

「美味しいよ」

という。

私と王が今まさに一つになった。少なくとも王の糧になれたと思ふと歡喜のあまり、その場でワルツを踊りたい気持ちになるのをグツとこらえる。

——しかし、そんな何気ない幸福の陰に魔の手が忍び寄つていた。

——豊かな土地。

——高度な技術。

——革新をし続ける国。

これらが諸外国から妬み、恨み、そして侵攻されるかもしれないという恐怖。小さなわだかまり。それらが諸^彼外国を駆り立てた。

オラーシャ帝國を中心として連合軍が作られた。アルブ Heim を取つたものが世界を制するとまで言われた。

確かに野心あふれるものも居たが、諸^彼外国全てが立ち上がったのは、何も、アルブ Heim 憎しで立ち上がったわけではない。大国に脅

されて、家族を人質に取られて、地位を奪われることを恐れて。様々
な言^理い^由訳が複雑に絡み合い出来た結末。

侵略の報を聞いたときに王は静かに「間がわるかつた」と焦るでも
怒り狂うでもなく、困った顔で悲しげに呟くのだった。

すぐさま、王は女子供を王城に招集した。不安になる民を前に「安
心してくれ」とだけ言って祈りを捧げていた。

食事の配給を終え、騎士団と戦支度をしている時、急に体の自由が
利かなくなる。それは私だけではないようで、騎士団に民が次々に倒
れていく。

それを見た王は悪魔のような高笑いをする。

「俺は命が惜しいんでね。逃げさせて貰うよ」

そういうと、剣を二本背負い、城から出ていこうとする。

「お待ちください、王!!」

私が呼びかけると王は高らかに宣言する。

「俺はお前たちを売ったんだ。そのくらい気が付かないほどバカでも
ないだろユステイー」

わざと皆に聞こえるように大声を出し城を出ようとする。

王は全ての怒りや憎しみを、お独りで背負い込むつもりなのだ。だ
が、この場に王の考え通りに思っている者は一人としていない。むし
ろ、逆だ。幾ら最強と言われた王でも報告にあつた数相手では…。

——皆を頼む。今日から君が皆のリーダーだ。

私の横を通り抜けたときに、私にしか聞こえない声でそう呟く。

「王！ 待って、キリト様!!」

涙でぐしゃぐしゃになった顔で叫ぶが王は振り返らない。

あれからどれだけの時間が経過したのだろうか？

動けるようになった騎士たちを編成、城の守備と前線に向かう二軍
に分け、私は精鋭ウィッチ隊を率いて箒に跨り王の元へと急ぐ。幾つ
かの砦を抜けた先に連合軍の兵と思われる屍が目立つようになった。
充満する鉄と血、死の臭い。

先を急いだ。

夜も昼も休まずに飛び続ける。

精鋭達の顔にも疲れの色が見え始め、一人、また一人と魔力切れで脱落していく。私も魔力などとうの昔に切れていたが気合で飛び続けた。遂には飛んでいるのは私独りに。

そして、国境を超える最後の砦。

地面に降りて、魔力切れでフラフラする体に鞭を打って砦へと歩む。

砦から臨む景色は地獄そのものだった。

戦闘はすでに終わっている。剣や槍が突き刺さる小高い丘。まるで墓標のようだった。雨が降り始める。王の影を探して戦場を永くさ迷い歩く。

どれくらいさ迷っただろうか？

一人の若き騎士が私のそばまで駆け寄ってきて跪く。

「クロステルマン様！ ききっ、キリト様討ち死にです！」

嗚咽の混じる震える声でそう告げられる。

頭が真っ白になる。間、に、……合わなかった。

ふと、見上げると見覚えのある剣を見つけた。王が友と認めた同格の存在の剣。見間違うはずがない。永久に届かぬ友の剣。祈りと敬意を払い、騎士の礼をしていた剣。

剣を力なく持ち上げると、ずっしりとした重さが伝わる。細剣やレイピアと違った重みがあった。鞘にその剣をしまい、歩き続ける。

いつの間にか雨は止み、泥だらけの姿で歩き続けた。

夕日に影が差したような気がした。

その方向を向くと黒いマントに剣が何本も刺さり、夕日に向かって立っている王の姿が映る。

「王!!」

駆け寄り、治療魔法をかけようとするが、魔力切れで治療ができない。

「……その声は、ユステイーツア…か？ すま…ない。これまでよく尽くし、支えてくれた。礼を言う」

「礼など不要です!! それが私の願いであり、望だったのですから!!!

それよりも誰か！ 軍医を速く！」

「もう…いいんだ」

「良くありませんわ！ 良くなど…」

騎士たちが私の声のするほうへと駆け寄って来る。

「あ…りがとうな…。その気持ちだけで、充分だ」

そういうと弱々しく笑い、光となって天へと昇って行つた。まるで、未練などない。否、未練を残さないようにやり遂げたような清々しい顔で逝ってしまった。

私は鞆に納めた王の友の剣を抜く。絶剣のユウキ様。この剣を我が血で汚してしまうことをお許しください。そして、王よ。私もお供させていただきます。

何人かの騎士が気が付き、止めようと動くがもう遅い。

愛していました。キリト様。最後まで、この日まで…、そしてこれからも。未来永劫いつ、いかなる時も…

絶剣の剣は私の胸を深く貫き、その場に倒れる。こ、れ、で…。あ、な、た、の、元…:

「また、この夢ですの」

片目から流れる涙を拭いながら目覚めの一言を口にす。

何度も同じ夢を見る。どこにでもある悲恋の物語。何代も前。妖精王キリトに仕えたユステイーツア・フォルン・クロステルマン。

最も偉大な王キリトに仕えた、最も偉大な騎士。

彼女に子供はいない。最も信頼できる親族にパ・ド・カレーを任せていた彼女。そして私、ピエレッテアンリエット・クロステルマン

の最も尊敬している女性、の一人だ。もう一人は勿論、坂本少佐。

それにしても、この夢は一体なんだろうか？ なぜ、気が狂ってしまいたいほど胸を焦がすのだろうか。なぜ、お父様を救った黒の剣士の話を聞いてから、その人の影を探し続けているのだろうか？